

---

その小さな女の子のことが気になってしまったんだが、どう接していけばいいんだろう  
すんのはじめ

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その小さな女の子のことが気になってしまったんだが、どう接していけばいいんだろう

### 【作者名】

すんのはじめ

### 【あらすじ】

通勤の帰り道、いつものところで芝生に座っている女の子。小高いところで遠くを眺めている。雨の日でも傘をさして立ったまま・・・きっと足元も濡れてしまっているだろう。気になってしまって・・・やがて、その子と友達になっていくうちに、僕の心の中には、天使のような彼女が住み着いてしまうようになって・・・年の離れた女の子とのふれあいが続いていく・・・そして、いつしかと 恋愛感情との間で、迷う僕なのだ

その女の子に気が付いたのは、大学を出て、勤め始めて1か月ほど経った時。5時過ぎ仕事を終えて、いつものように自転車でその公園の横を通って、坂を下りて行くのだが、独りぼっちで、芝生の小高い丘に座り込んで、眼下に見渡せる街並みを眺めているのだ。

僕は、隣の県の大学を卒業して、4月からこの町のスポーツセンターに勤めていた。就職活動も真面目にやってなかったもので、年が明けてから、適当なところが無いかと探し当てたところだった。大学の時はサッカー部に所属していたので、スポーツインストラクターということでもちょうど良かったのだが、実際の仕事といったら、グラウンドの整備に雑草刈り、そして、借りる人の受付とかをするという具合だった。最初はこんな調子じゃあ無かったはずと思っただが、今では、まあ気楽でいいかーという気になっていた。支給された名刺にもスポーツインストラクターと並んでグラウンドキーパーの文字が書かれていた。土日は勤務日になっていたのだが、僕は気ままな独り暮らしだし、やることも無いので、別に良かったのだ。

それから気に掛けていると、毎日、その子の姿を見るようになっていた。そして、いつも独りっきりだった。その横には、赤いランドセルが友達のように置かれている。その日は、しばらくその様子を見ていたのだが、女の子は下に広がる景色を眺めて、ランドセルを膝に乗せて台にして絵を描いているようだった。鉛筆だけで、眼の先の景色と手元の紙だけを見て描いているようなのだ。小学校か

らここに来るのには、登坂になっていて、子供の足では30分近くかかるだろう。だから、その子の家はここ近所なのかなって考えながら、帰って行った。僕は、駅の近くのアパートを借りていて、キッチンのエリアと一応別れている部屋がある1DKということだったが、2階なので日当たりも良かったし、ベランダもあって洗濯機もそこに置けるようになっていたので、ここに決めていた。それに、就職前には知らなかったけど、住宅手当という形で家賃の半分近くが補助されていたので助かっていた。

僕は、雨模様の日は歩いて来るようにしていたけど、その日の帰りは雨が降り出して、帰る時、その公園のほうを見ると、やっぱり女の子は居た。傘をさして、ランドセルを背負って立ったままで、景色を見ていた。ショートパンツに運動靴なのだが、その足元は濡れてぐずぐずになっているようだった。どうしてなんだと気になったのだが、変に声を掛けたりするのもなぁと躊躇して、そのまま坂道を降りて帰ることにしたのだが、その女の子のことが気になってしょうがなかったのだ。やっぱり、普通じゃあないな、なんか特別な事情があるんだと思っていた。

4月も終わりがけで世間はゴールデンウィークになろうかという日。その日は祝日だったけど、僕は出勤日でグラウンドでサッカーをやっている少年たちを見守っていたのだが、お昼休憩の時に、隣の公園のほうに行ってみると、あの女の子が芝生に座って絵を描いているようだったのだ。

改めてみると、長い髪の毛を左右に分けてゴムで留めている様だった。今日は、ランドセルは無く、本当に独りぼっちという感じで座っていた。僕は、お昼ご飯には自分で作ったおにぎりを持ってくるようにしていた。以前はお弁当屋の配達のを食べていたが、だんだんと飽きてきていたので、自分で作るようになっていた。何となく、近づいていくと、女の子は水筒をさげているようだったけど、お昼ご飯らしきものは無かったので

「ここ座っていいかなー」と、言ったけど、女の子はビクツとしてチラッと僕のほうを見ただけで、黙って、又、景色を見て絵を描いていた。長いまつ毛でその瞳も黒く大きく見えて、一瞬、僕はドキッとしたのだ。僕は、構わず、近くに座っておにぎりを取り出した。だけど、女の子は又、ビクツとして、警戒しているみたいだった。

「良かったらこれ食べてくれない？僕は、ひとつで十分なんだ」と、差し出してみた。女の子はやっぱりチラッとみただけで、鉛筆を置いて、その細い腕で自分の足とズックを隠すようにして、

真直ぐ前を見たまま

「いらぬ」と、ポツンと言ったきりだった。だけど、気のせいかなその腕が震えているような・・・。

「まあ そう言うなよ あやしい者じゃあないよ これ、鰹節を甘く煮ただけだけど うまいぞ」と、女の子の眼の前に差し出した。すると、黙って手に取って食べたのだ。

「ありがとう おいしい」と、又、ポツンと言ったきりで・・・前を向いたまま景色を見ていた。5年か6年生ぐらいなんだろうか、色あせたようなポロシャツに赤いショートパンツなんだが、汚れて黒ずんでいるような感じだった。そして、日焼していて褐色の細い脚が見えていた。

「ねえ よく ここに来るの？ きれいだよね この景色」

「・・・」

「僕は、そのスポーツセンターに勤めているんだよ 今年からネ 初めて ここに越してきたんだー だから 知り合いもまだ少ないんだよ」

「・・・」彼女は、左手で足元の小石を拾って、前に投げた。まるで、早くあっちへ行けって言って抗議しているようだった。

「お嬢ちゃんは 運動は？ 好き？」構わず、僕が話し掛けると

「・・・あのね お母さんから知らない人に話しかけられても、無視しなさいよって言われてるからー 話さないの！」

「そうなんだ 警戒するよね ごめん ごめん じゃあ 仕事だから、もう、行くネ 退散だ 邪魔しちゃってごめんネ」と、僕は立ち上がった

「そうだ 今度は 知らない人じゃあないだろう」と、立ち去ろうとしていたら、初めて、その子は僕と眼を合わせてきていた。長いまつ毛の澄んだ可愛い眼差しだった。だけど、相変わらず黙ったままで、又、景色を見つめて絵を描いている女の子に戻っていた。

その日は、少年サッカーの試合なんかも行われていたため、帰りがいつもより遅くなってしまって、もう辺りも暗くなり始めていた。そして、公園のほうを見ると、まだ、あの子が居るのだ。僕は、気になったものだから、驚かさないようにと大きな足音を立てて近づいて行って

「まだ 見ていたの？ もう暗くなるから・・・」

「・・・」

「あのさー お家の人心配するんじゃない？ 家 この近く？」

「・・・」

「僕の名前は 北番 秀《きたばんしゅう》 お嬢ちゃんの名前は？」

「・・・」

「もう 知らない人じゃあないだろう 一人っきりじゃあ危険だから送ろうか？」

相変わらず、前を向いたままだったけど、ポツンと

「もう 帰るから・・・ いいの 独りで」

「そうか 大丈夫かい？」と言うと、その子は走って坂道を下って行った。真直ぐに前を見て、振り返るつもりも無かったみたい。その様子を僕は坂の上から見守っていたのだ。束ねた二つの髪の毛も揺れている感じもなかったので、そうとう早く走っているのだろう。

僕は、その子が見えなくなるまで、そこに居て、ようやく自転車をこぎ出して坂道を降りて行った。何だか、その子に追いつくのも悪いような気がしていたからなのだ。

帰りにスーパーに寄って、おかずとかを買っていたのだが、ふと、おにぎりに入れる具材にあの子は何か好きなんだろうとか、頭をかすめていた。買い物カートを押しながら、あの子と同じくらいの女の子がお母さんに食べたいものをねだっている様な後継が眼に入った。その様子を見て、僕が、余計な事をする必要ないよナーアあんまり、変なことをすると警戒されるナと、思い直していたのだ。

それから、世間の休日の間には、あの子は公園に来てなかったみたいだった。僕は、その間、おにぎりを用意して持っていくようにしていたのだが。

そして、小学校が始まる日。仕事の帰りに公園を見てみると、あの子が座っていた。僕は、傍に寄って行って

「やぁ 来てたんだ 隣に座っていいかい？」

「・・・」僕は、構わず座っていた。だけど、その子は自分の座っているところをずらすようにして、少し避けているような感じだった。

見ると、今日も何かの紙に鉛筆で街の絵を描いていた。それも、かなり細かく丁寧に描いていた。おそらく、上手というのだろう。だけど、よく見ると何かのプリントの裏みたいだった。ランドセルを膝の上に乗せて、それを下敷きがわりにして、街並みと手元の紙を交互に見て、僕のことなんか無視しているようだった。確か、この前までは髪の毛を両方に二つに分けていたと思っただが、今日は後ろにひとつにしてゴムで束ねていた。半袖のチェックのブラウスを着ていて、細い首がのぞいていたのだが、その襟元は擦り切れてきているようだった。申し訳ないけど、僕はこの時、この子はあるまじり家の人から構ってもらえてないんだなって考えていた。

連休中に遊びに行ってきたという職場のパートさんからもらった  
どら焼き饅頭があったのを思い出して、

「もらったんだけど これ食べるかい？ 僕はあんこ苦手なんだ」  
と、彼女の横に包みのまま置いた。彼女はそれをチラッと見たけど、  
又、無視したように絵を描き続けていた。

「じゃあー じゃますると悪いから」と、僕が立ち去ろうと歩いて  
いる時

「ありがとう おじさんって怪しい人じゃあないよネ」という声が  
背中から聞こえた。振り返ってみると、彼女はそのどら焼きを喰ら  
いつているようだったけど、僕には彼女の小さな背中しか見えな  
かったのだ。

だけど、帰り道、ようやく打ち解けてきてくれたような気がして、  
僕は晴れやかな気分だった。だけど、おじさんは無いだろー

次の日は朝から雨が降っていて、夕方になるにつれて強くなってきた。僕は、今日は雨模様なので歩いて来ていたのだが、帰るとき公園に眼をやると、あの女の子が傘をさして立ったまま下の景色を見詰めていた。

僕は、気になってしまったので、近寄って行って

「どうしたの？　こんな雨が降ってるのに・・・何　見てるの？」

「・・・」

「相変わらず　だんまりかい？　もう　足元がずぶ濡れじゃあないか」と、僕は着ていたナイロンジャンパーを脱いで、その子の腰から下に巻いていった。その時、腰を引くようにして

「あっ　いいんです　構わないでください　こんなの困るうー」

「だって　冷えるだろう　そんなに濡れて　風邪ひくよ」と、僕は構わず、女の子の腰の前ところで袖の部分を結んでいって留めていた。

「・・・すみません」

「いいんだよ　ねえ　ここで　何してるのー　いつも　景色見て」

「・・・」

「ああ ごめん 余計な お世話だよね じゃあ お嬢ちゃん 名前ぐらい教えてよー」

「ゆきむら なの」

「なのちゃんかあー きれいな名前だね どんな字なの？」

「なっぱ なっぱ 野原の野」

「へえー かわいいね 何年生？」

「6年」

「そうか でも、今日は雨だし 暗くなるの早いから、もう帰りなさいよ おうちの人も心配するだろう？」

「・・・ ダメなの 6時過ぎるまで・・・」

「・・・ダメなのか ふくん じゃあ もう少し 僕も付き合おうよ」

「あっ いいんです これ お返しします 帰ってください 私ひとりで大丈夫です」

「ああ まあ いいじゃないか 今日は 絵 描けないね 絵

描くの好きなの？」

「・・・そーいうわけじゃあないけど・・・でも絵描いていると色んなこと忘れられるから・・・」

「そうかぁーでも上手だよ絵この前のも丁寧だし」

「あのね ななはね 絵を描くのにな あのお家は幸せなのかなー不幸なのかなーとか 多分、赤ちゃんが居て、笑っているのかな泣いているのかなとか お金持ちなんだろうか、それとも貧乏会社だったら 社長さんは怖いんだろうか優しいんだろうかなんて想像しながら描いているんだあ」

「そうかぁ 楽しそうだね 君の夢はなんだい？」

「・・・私は・・・夢なんて 持たないようにしてる：持っちゃあダメなんだよ！」

「そんなーこれからだろう まだ・・・そのー子供なんだから」

「そりゃーいろんな人いるよ もう 帰るね おじさん ありがとう ジャンパー 温かかったヨ」と、言うどジャンパーを僕に返して、傘をさしたまま走って坂を下りて行った。

やっぱり、あの子は複雑な事情を抱えてるんだと僕は考え込んでいた。そして、決して幸せな環境では無いのだろうと。その日は、

買い物に行って、若干のお菓子とスケッチブックを買っていたのだ。

次の日は朝から素晴らしく晴れていて、僕は朝からグラウンドの伸び始めた雑草を除去していて、午後からもその作業をしていた。4時すぎになって、女の子がやってきて、何故か僕のほうをしばらく見ていたが、公園に向かって行った。

仕事の終了時間になって、僕は公園を目指していた。少し、ドキドキしているのが自分でもわかっていた。近寄って行って

「やぁ こんにちは 晴れてよかったネ これ クッキー食べなよ  
ー」

女の子はチラッと見たけど、何にも言わないで、何かのプリントの裏なんだろう、その紙に絵を描き続けていた。僕は、予想していたことなのでポリ袋に入ったお菓子を彼女の横に置いて

「あのさー 事務所に誰も使わないスケッチブックがあったんだよ  
これっ 使ってくれないか？ 誰も使わないから、もったいない  
からね」と、スケッチブックとビニールの袋に2HとHB・2Bが  
セットになったものを、彼女の前に置いた。

彼女はしばらく、それを見詰めていたけど、邪魔なようにそれを振り落として、絵を描き続けていた。

「じゃますると悪いから退散するね」と、僕が帰ろうとして数歩歩

いたところで、彼女が追いかけてきて

「あのー こんなの貰う わけに いきません 返します」と、ス  
ケッチブックと鉛筆を持って差し出してきた。

「どうして？ それで、素敵な絵を描いてよー 僕に ねっ なな  
のちゃん」と、笑ったつもりだったのだが・

「・・・」 なのちゃんは、しばらく立ちすくんでいたが

「あっ 私 お尻 濡れている やだー おしっこもらしたみたい  
になってる」と、お尻の部分を押さえていた。彼女は多分、ハンカ  
チを敷いていたのだろうけど、昨日の雨が浸み出していたみたいだ  
った。

「うふっ だね なのの赤ちゃん」

「ちゃうわー 私・ あのださー なんで おじさんは なののこ  
と そんなに構うの？」

「なんでって・・・なののちゃんは友達だからかなー それに、お  
じさんは可哀そうだろう？ せめてお兄さん」

「友達？ なのなは 暗いし、笑わないから みんなから除け者なん  
だよ」

「そんなー 人間はみんな 誰とでも友達になれるように生まれて

きてるんだよ　なののちゃんだって」すると、なののちゃんはしばらく考えている様子だったが

「・・・」黙ったまま、スケッチブックを抱えて、振り向いて戻っていった。だけど、長いまつ毛が濡れていたように思っていた。そして、シヨートパンツの赤が湿って濃くなったところが、くっきりとその可愛いお尻の部分に見えていた。

そして、次の日も快晴で、公園にはあの子の姿が見えた。僕が近寄っていくと、顔をあげて、僕の顔を見るなり

「シユウ君　この鉛筆書きやすいの」と、初めて見るような可愛い笑顔をしてきた。そして、描いている絵を見せながら

「ここのおうちは　女の子が学校から帰ってきて、お母さんにおやつをおねだりしているところにお兄ちゃんも帰って来たの　このおうちは泣いている赤ちゃんをお母さんが抱っこしてあやしているの　ここのおうちはね　お父さんがお仕事お休みで子供とお庭でボール遊びしてるの　・・・それからね　・・・このアパートの部屋では・・・学校から帰ってきた女の子が・・・誰も居なくてね・・・」

それ以上は、言葉が続かなかったけど、僕は、その時、なののちゃんの家庭環境を一瞬見えたような気がしていた。

「そうか　いろんなことを考えながら描いているんだね　だから、絵の中の街が生きているんだ　上手だよ」

「そう シュウ君のために 一生懸命 描いているんだよ」と、照れくさそうに絵に向かっていた。

「なのちゃん 僕のこと 友達って認めてくれたんだ」

彼女はしばらく考えている素振りだったが、黙ったまま頭を下げて大きく頷いていた。その時から、僕とななのの触れ合いが始まったのだ。

それから、気軽に挨拶程度は交わしてくれるようになり、僕は、時々お菓子を持って、その場所に訪れていた。

梅雨の合間の暑い日、僕は、グラウンドの除草作業で端っこのところで、強い日差しを浴びて、草をむしっていると

「シュウ君 暑いのにご苦労様」と、明るい声で・・・なのちゃんだ。膝をさすりながら、側に寄ってきてくれた。

「おっ 帰ってきたのかー あれえー その膝 どうしたの？ 血が滲んでるよ」

「うん そこで 溝を飛び越える時、すべっちゃったー でも 平気だよ」

「平気だよじゃあないだろー バイ菌が入ったら大変だよ 洗おう」と、なのちゃんの手を握ろうとして、ホールの横にある水道のところ连接到行こうとしていた。だけど、なのちゃんは咄嗟に手を引っ込めていた。でも、初めて触れるんだけど、ちっちゃくてキヤシヤな手で鶏のチューリップなんかの骨よりも細いなど感じた。

側溝を乗り越える時、繋いでいた手を放してしまった時

「いやだぁー 離れたら・・・」と、小さな声が聞こえた。

「エッ」と、振り向いたけど

「何でもない もう ええねん」と、下を向いて答えていた。

水道のところで待たせて、事務所からガーゼを持ち出して、擦り傷に付いている砂を洗おうと水に浸して触ると、ビクツとして細い腕で膝を隠すようにしていた。

「痛いよー もう ええってー」

「これっくらい我慢しろよ ちゃんと砂くらい落としておかないとなー」と、なのちゃんの膝を支えながら、その時、彼女は震えて怯えている感じだったのだけど、僕は、その時、気に留めずに、汚れをふき取って傷テープを貼っておいた。

「よーし これで いいよ そうだ 今日は日差しも強いから、帽子貸してあげるから 被っておけよ」と、僕の被っていた麦藁帽を渡そうとすると

「いらん！ 今日から あそこの建物の中で描こうと思ってんねん あそこやったたら、雨でもあんまり濡れへんやろー」と、公園の端のほうにある屋根付きのベンチを指さしていた。

そこは、見晴らしとしては少し悪くって、僕の居るグラウンドからは見通しも良くないので、なのちゃんの姿があんまり見ることが出来ないのです、少し気になったが日差しを避けるためには仕方がないかと思っていた。

仕事の時間が空いた時に、僕は缶ジュースとパイ菓子をもらって、

なのちゃんの様子を見に行った。相変わらず、景色を描いているようだった。

「暑くないかい？ これ 差し入れ 休憩しなよ」

「ありがとう ちょっと 喉が渴いていたの」

「これからは 水分取らなきゃー 熱中症になるよ」

「そうだね 水筒持ってくる」

「もう直ぐ 梅雨があけて 夏休みだね なのちゃんは家族でどっか出掛けるの？」

「・・・」なのちゃんは黙ったまま、自分の足もとを見たまま下を向いていた。その時、長いまつ毛が濡れているような気がした。一瞬、しまった 悪いことを聞いてしまった と僕は、後悔していた。その場を立ち去ろうとすると

「あのなー シュウ君 ななは お父さん おらへんねん お母さんと 二人っきりなんや だから お金も余裕ないねんて」

「そうか さっき 悪いこと聞いてしまって ごめんな」

「ううん かまへんでー シュウ君 友達やから 話しておいたほうが 気が楽やしなー それに、この前 なな 久しぶりに笑ったみたいやった」まつ毛の奥の黒い瞳が光っていた。

「そう ありがとう でも なのちゃんは明るくていい子なんだからな」

「そんなことないねんで 学校ではなの、暗いから 友達も近寄らへんねん シュウ君だけや 気楽に話せる気がする」

「おお 何でも話してくれていいんだよ 相談にも乗るから」

それから、雨の日でも公園のベンチにななのちゃんは来ていた。毎日、僕は、近寄っていて何かしら声を掛けていたのだけど、黙ったまま絵を描いている時もあった。

夏休みになって、朝から来ている様だった。僕は、気になって、お昼休みに寄って行ってみて

「ななのちゃん お昼ご飯は？」

「ウン おにぎりとお水筒持ってきてるよ 梅干しとかキュウリの塩もみなんだ でも、大根の葉っぱ炒めたのは、あんまり好きじゃないの」

「そうか 食べてんならいいんだけど なんにもないんかなって思ってた」

「大丈夫だよ シュウ君 心配してくれてんだあー」

「まあな 一応 不思議ちゃんだからー」

「なによー ななちゃんには シュウ君のほうが不思議ちゃんだよ 私みたいな子に声掛けてきてー 彼女とかに叱られないの？」

「ああー 彼女なんか居ないよ そういう縁は無いなあー」

「そう とりたてて女の子にもてる雰囲気ないもんなぁー」

「悪かったなー こっちに その気が無いだけやー」

「うふっ でも シュウ君 なかなかいけてるよ」

「からかうんじゃないよ 子供のくせして」

「・・・そんなのー 直ぐに ななは大人になるよー」

「そうか そうか いつかみたいにおしっこ漏らしたみたいになんなきやぁーな」

「・・・あー だからっ ちゃうってー あん時はぁー もうぅーやだぁー」と、ななのちゃんは、僕の肩を叩いてきていた。

「へへえー あのさ あさって 僕は休みなんだ こどもの森に行ってみないか？ 1時間ほど歩くけど スライダーとかあるみたいだから いつも ここじゃぁ つまんないだろー」

「・・・なんでー なんで、ななを誘うの？」

「なんでって ななのちゃんが楽しんでくれればいいかなーって」

「・・・行く 本当に連れてってくれるの？」

「ああ もちろん 君が良けりゃー」

「ななちゃんは 楽しみに してる」と、小さな声で下を向いて答えていた。

次の日、ななのちゃんに会った時

「昨日、ななネ お母さんに 遊びに行くこと話したの スポーツセンターの人とって それと友達3人位ってウソついちゃった したら、変な関わり方しないでねって、言われちゃった」

「心配なんだろうね まして、女の子なんだから余計だよ」

「シュウ君 変な人？」

「お母さんからしたら変な人だろうな 一緒に遊びに行くなんてとんでもないって言うだろうね」

「でも 変なことってしないよね？ シュウ君は」

「もちろんだよ ななのちゃんは友達のもりだし・ 誘ったんは、君がいつもひとりぼっちだから・ お互い 楽しめればいいかなって思ったんだ 迷惑だったカナ？」

「ううん お母さんには ウソついちゃったけど ななは行きたい」

「ウン あのさー これ 暑いから 余計なお世話なんだけど 買ってきた 明日、被っておいでよ」と、昨日、買ってきたつばがそんなに大きくなくてリボンとか花飾りが取り換えられる麦藁帽を渡

しながら

「・・・ こんなの 困るう 帽子なんて要らないから・・・」

「そう言うなよ 熱射病になっちゃうよ これ 折りたためるらしいから、しまっとけるだろう」

なのちゃんは黙ったまま受け取っていた。たぶん、戸惑って考え込んでいるみたいだった。その日、別れる時も、黙ったままだったのだ。

当日の朝、僕たちは銀行の駐車場で待ち合わせをしていた。僕は、お昼ご飯におにぎりと考えたが、暑さでいたむ恐れもあるからと、どっか食べ物屋さんぐらいあるだろうと、タオルと傷テープだけを念のためと思ってリュックに詰め込んでいた。なのちゃんがやってきた時、小さなリュックと麦藁帽を被っていて

「おはよう シュウ君 これっ 可愛い？」花飾りのほうを付けていたのだ。

「ウン 可愛いよ それはひまわりなのカナ」

「そう なな こんな初めて ありがとうネ」

「気に入ってもらえてよかったよ さあ 行こうか 誰かに見られると 具合 悪いんだろー？」

「だね しばらく 離れて歩くね」

と言いながらも、半分ほど歩いて坂道になってきた時、なのちゃん後ろから僕の手を手繰り寄せるようにして繋いできた。

「知ってる人に会ったら 親戚のお兄さんって言っている？」

「ああ いいよ 大丈夫？ 疲れてない？」

「ウン シュウ君より なののほうが毎日 歩いているよ 平気！」

公園に着くと、直ぐに なののちゃんはロープスライダーに走って行って、数人が並んでいたけど、順番がくると、僕に手を振りながら下っていった。その後、駆け寄ってきて

「すんごく 気持ち良かったよ ねえ もう一回 行ってきていい？」と、可愛い笑顔して聞いてきていた。

「ウン 帽子 持ってるよ 飛びそうだろう？」なののちゃんは帽子とリュックを僕に渡すと駆けて行って、又、並んで、自分の番になると、大きく僕に手を振って、今度は足を広げて下っていたのだ。

その後、長いローラーのスライダーに向かって行って

「シュウ君 前 なのは後ろに付いて滑る」と、僕を前に座らせて、なののちゃんは僕の背中にくっついて手を廻してきて滑り始めた。真ん中ぐらいくると

「なあ お尻 熱いよ 焼けてるんだ」

「そうだね じゃあ 足つけてしゃがんで滑ろー」と、言われるままにして滑り降りて

「うふっ おもしろい 今度は なが 前ね」と、又、僕を引っ張るように連れて行った。僕は、躊躇したが、とりあえず、なな

のちゃんの腰のあたりを支えるようにして滑ったのだ。何回かそんな風にして滑った後

「ねえ なな おにぎりしてきたんだ 食べよっ」と、木陰のベンチを指さしていた。

「おかか 甘くしたの シュウ君が 初めてくれた時 おいしかったから」

「そうかー なのちゃんが作ってきてくれたんだ じゃー うまいだろう」と、僕は、ちょっと感激して食らいついたていた。

「おいしいよ なのちゃん じょうずだね」

「よかった おいしいって言ってくれて うれしい」

「なのちゃんはサー 自分のこと 時々 なんて言うよねー」

「ん なな だから おかしい？」

「いいや いいんじゃないか べつに」

その後、森のコースを歩いていると、なのちゃんは僕と腕を組むように手を繋いできて

「シュウ君 恋人同士ってこんな感じなんでしょ？」

「まあ そうだね 残念ながら なのちゃんは親戚の女の子だね」

「・・・なのはネ 今日 楽しかったヨ 友達とも こんな風にごんだこと無かったし 小さい頃、お父さんと遊んでもらったことあった」

「そうか そりゃー 良かったヨ」

「ねえ 今日だけ？ なのは・・・ 又、遊びに連れて行って欲しい」

「あぁー 機会あったらネ」

次の日、ななのちゃんは僕のあげた帽子を被って来ていた。僕は、とりあえず安心したのだ。

「こんにちわ　ななのちゃん」

「うん　シュウ君　昨日は楽しかったよ　ななネ　お風呂に入ってる時、気が付いたんだけど、手首のところ　赤くなってた　ロープでカナー」

「そう　必死にしがみついていたもんなー　大丈夫？」

「うん　たいしたことないんやー　平気」と、被っていた帽子を脱いで

「夕立になりそうやねー　あっちの方　空が黒くなってる」

「そうだね　降られないうちに帰ろうよ」

「ううん　まだ帰らない　6時頃まであかんねん」

「そうか　じゃあ　僕も　付き合うよ」

「あのなー　シュウ君　なな　お父さんおらへんねんって話したやろー　私が小学校に入った頃　突然　おらんようになってん　お母

さんはおらんようになるのって、うすうす知っていたみたいやっただけど」

「そう・・・」僕は、何と言っているのかわからなかったけど、なのちゃんは続けて

「今から考えたら お母さんもそのほうが良かったみたい 私が2年になった時やった 学校から帰ったら、お母さんが男の人と下着のまま抱きあってるの見てしてもん 私だって 何してるんかわかったわー それからな 学校が終わっても、夕方まで家に帰らんよ うにしたんや そのうち 自然とお母さんも、ななに6時ぐらいまでは帰ってこないようになって言うようになったの」

「そうかー そんなことがあったから・・・可哀そうに・・・」

「ううん そんなことないよ シュウ君と友達になれたしー」と、それまで下を向いていたけど、まとめた髪のおくれ毛を耳元に掻き揚げるしぐさをして、僕のほうに笑顔を見せてきた。その時、一瞬、女としての顔を見たような気がしていた。

「なあ シュウ君 独りなんやろー マンション なな 泊めてくれへんやろかー？」

「ええー なんてことを・・・ そんなことできる訳ないよー お母さんにも叱られるよ 子供監禁になるわ」

「そんな大げさなもんやなくて コソツとね」

「だめ ダメ！ 一応 男と女やないか まして、なのちゃんは子供なんやから 叱られるに決まってるよ 警察にも捕まるわーなに言い出すねん」

「あのかなー 海水浴に行こうって言われてんねん お母さんからだけど、よその男の人も一緒なんやー 去年も行ったんやけどなー その人、海の中で泳いでいる時、なののお尻とか胸とかも時々触ってくるんや それにな、なのとお母さんがお風呂に入っている時にも、その人も後から入ってきてなー お母さんが頭洗ってる時、私の身体を洗うふりして、身体中撫でまわすんやでー それに、なのの手を取って無理矢理あそこを触らせようとしてくるねん いやらしーねん 考えすぎかわからへんけど 私 声も出せなくたってお母さんには、そんなこと言われへんかってんけど．． 今年も、一緒や言うから．．嫌や なの は 行きとーないねん そやから その時 シュウ君 泊めてーな シュウ君 やったら 変なことしーひんやろー」

「そりゃー なののちゃんは 子供やし そんなことしないけどなー」

「なあ お願い 私 一人で留守番するって言うし そやけどなー なの は 独りだけやと怖いんかーあ お母さんも、男の人とふたりだけのほうがええねんでー 去年も私が寝たと思ってるんか、隣で変な声聞こえてくるやでー 多分．．抱き合っただけ．．私やって 男と女が何してるんか、もう、わかってるわー」

「うーん　なのちゃんの気持ちはわかるけどなあー　でも　それは　もう　ちょっと　なんとか　考えようよー」

「あのかなー　うちに来てるのって　その人だけちゃうみたいやね　ななに、6時前に、急に帰ってきたらあかんって言うねん　そやから、ずーと　ここに来てたのー　お母さん　男の人にいろいろと助けてもらってるって言ってたけど・・・ウチ　お金ないやろー　でも　ななは　そんなお母さん嫌いやー　軽蔑してんねん　そやから　ななは　お母さんを裏切るようなことしてもええって思ってる」

「だけどさー　まだ　日があるんやろー」

「ウン　1週間後」

「まあ　考えようよー　僕のところに泊って、二人っきりって　絶対　ダメ」

「シユウ君 ななナー 旅行行かへん お留守番してるって言ったんや そしたら お母さん そうって言って なんか ほっとして 喜んでるみたいやったでー じゃまもんおらへんからなー」

「ええー そーなんかあー ななのちゃん それでいいんか？ お母さんと・・・一緒になくて」

「うん 今のお母さん嫌いやあー ええんやー シユウ君と一緒にのほうが・・・」

「あのさー 僕の実家に一緒に行こうか？ 木之本という所 なんにも楽しめるところ無いけどなー」

「ウン 行く！ ええのおー？」

「ああ しかたないやろー ななのちゃんと 二人っきりってわけにいかんからなー」

「なんでー あかんのかーあ」

「あかん お嫁入前やし」

僕は、電車の切符をななのちゃんに渡しておいたので、次の駅から乗ると言っていた。電車に乗り込むと、彼女は珍しくタイトな

スカートで来ていた。だけど、乗り換えの駅まで話し掛けないという約束だったから、眼で合図しただけで、お互い知らんぷりをしていたのだ。

乗り換えて、隣同士で座っていたけど、緊張しているような感じで、なのちゃんは窓の外を見ていて言葉少なげだった。

「なのちゃん めずらしく、今日はスカートなんだ」

「うん お出掛けだからネ 気分変えた」

駅を降りて20分ほど歩くのだけど、例の帽子をリュックから取り出して、被った

と思ったら、僕の手を握ってきて歩き出していた。

「なな あんなに 長いこと 電車に乗っていたのって 初めてかも でも、畑や田んぼばかりなんだね」

「そーだなー 田舎だからな この辺りはもっと田舎だよ」

「そーだね シュウ君もこんなところで育ったんだ」

僕の実家に着くと、倉庫で二つ上の兄貴とそのお嫁さんが作業していた。実家は椎茸農家で、おそらく乾燥椎茸の作業をしていたのだろう。最初に、僕達の姿を兄貴が見つけた

「おう 秀 あっ お嬢ちゃん こんにちはわ 暑かったろー」と、

後ろから、嫁さんの　かがみさんも出てきていた。

「こんにちわ　お世話になります　ゆきむらなのです」と、帽子を取って挨拶をしていた。

「こんにちわ　まあ　秀君　可愛いガールフレンドね」と、

かがみさんは僕の高校の時の同級生で、去年、兄貴と結婚して、同じ敷地内に新居を建てて、実家の椎茸農家を手伝っているのだ。だから、僕は、高校の時のことがあるので、ちょっと苦手なのだ。

そして、母屋に行って、僕の父母に紹介して・・・僕は、予め事情を説明しておいたから、それなりに受け入れてくれていた。

「なのちゃん　なんにもないところで面白くないでしょうけどね　夕方になったら、お風呂に入って　浴衣着せてあげる　近所で借りてきたの　ウチは男の子ばかりだったから」と、扇風機の風をなののちゃんに向けながら、母は苺の洗ったのを勧めてきていた。

「えー　そんなのー」と、なののちゃんは僕のほうを向いて「いいの？」と、問いかけているようで、僕は、うなずいて見せていた。

それからは、なののちゃんは庭に向かって、絵を描いていたのだ。

「思い出だからネ　残しておきたいの」

夕方になって、母はなのちゃんをお風呂に入れて、浴衣を着せていた。ピンクに花火の絵柄で、髪の毛かがみさんが来てくれて、長い髪の毛を上に乗るようにして、花飾りもつけて、大人っぽく仕上げていてくれた。

「シュウ君　こんなの　私　似合う？」と、僕の近くに飛ぶように走ってやってきた。

「わぁー　可愛いネ　大人っぽいなぁー」

「そう？　ななは、こんなの初めて　うれしい」

辺りが薄暗くなった頃、かがみさんも浴衣に着替えてきてくれて、なのちゃんを誘って庭で花火をしてくれた。僕は、縁側で父と兄貴とでビールを飲んでいたのだが

「やっぱり　女の子は可愛いのー　あの子は特別　可愛い　無邪気で　秀が言っていたような　暗いと感じさせないようだ」と、見ている父が言うと

「秀　どうするんだ　あの子　あんまり　深入りしてもなぁー」と、兄貴が立ち入ってきた。

「どうって　小さいガールフレンドかなー　ほっておけない　気に

なるんだよ」

「だから 深入りするなって ややこしいことになるぞ 小学生だろー」

「わかってるって だから 今日は 家に連れてきたんじゃあないか」

そして、夜になって、かがみさんが

「秀君 どうするの？ 寝るの 一緒の部屋に布団敷いていいの？」と、意地悪そうに僕の顔を覗き込んで聞いてきた。

「そんなわけないじゃあないか 別だよ」

「だって 小さい女の子 独りで寝かすわけにいかないんじゃない？」と、意地悪な眼をしていた。

「うーん そうかなー どうしよう」

「うふっ 私が 泊りに来てあげる 一緒に寝るわよ 安心して」

「そうか 頼むよ 助かる かがみさん やっぱー 同級生だな」

「ちがうよー 君のお姉さんだからネ 今や それに 君の大切な ガールフレンドだから あの子 秀君が良いんだったら、お嫁さんになるって言ってたよー どうする？」

「かがみ まばたきが多いなあー そんな時はからかってるんだろー わかるよー 高校の時からだからな」

「うふっ 自分で確かめればー でも 良い子よ」

次の日、ななのちゃんは朝早く起きて、又、庭の絵を描いていた。そして、帰る時、母にそれを渡して

「一生懸命 描きました きれいなお庭 私の思い出だから 貰ってください」

「まあ ななのちゃん 上手ね 飾っておくわ また 遊びに来てネ 何にもない所だけど」

「いいえ なな 楽しかった 浴衣も着せてもらえて 初めてだったし うれしかったの」

早々に帰ることにして、駅まで、兄貴が車で送ってくれて、電車に乗ると、ななのちゃんは腕を組むようにしてきて

「楽しかったよ よかったあー 親切にしてくれて かがみさん おいでって一緒のお布団で抱いて寝てくれたんだよ 胸が柔らかくて・・・ でも、ななは 本当は シュウ君と二人っきりでも良かったんだよ」と、僕の手を小さな手で握り締めてきていた。

そのまま夏も終わって、秋にななのちゃんが修学旅行に行くって言うっていた。帰ってくるという日、僕は、仕事を終えて、何となく、小学校に向かっていた。

学校に着くと、バスが子供たちを降ろして帰っていくところだった。そして、校庭では、先生の挨拶が終わったのか、父兄がそれぞれの子供たちを連れて帰る様子だった。僕は、それを遠巻きに眺めていたのだが・・・みんながそれぞれに帰って行って、人も少なくなった時、ポツンと一人でななのちゃんが立っていた。

そして、しばしばらくほうを見ていたが、急に走り出して向かってきた。

「遅いゾー シュウ」と、僕に飛びついて、胸に顔をうずめるようにして腰に手を廻して、しがみつくように、そう言った声は泣いて震えている様だった。

「ええー 迎えに来るなんて約束したっけえー」

「だって 帰りのバスの中で きっと シュウ君が来てくれていると ななはネ 感じたんだもんー よかったー 信じていて」

その様子を見ていた女性の先生が近づいてきて

「なののちゃん 大丈夫？」と、不審がって聞いてきた。

「うん ここみ先生 なのの大好きな親戚のお兄ちゃん 迎えにきてくれたんだあー」

「そう 良かったね なののちゃん」

「うん 一緒に帰るネ」

一緒に歩きながら、僕は自転車を押して

「さっきの人 会ったことがあるよ 保健の先生だらう？ 一度センターに来られた時、挨拶したことがある」

「そうなの？ いつも なののこと 気に掛けてくれる 優しい先生」

「そうなのか うん 優しそうな人だネ」

「ねえ このまま シュウ君ち 行っても良い？」

「うっ いいけどー まだ 時間 早いのかー」

「そう まだ 帰るの怖い」

「わかった いいよ」

僕の部屋に上がり込むと、キッチンの隣の部屋とかバスルームを見て回って

「よし！ 女の臭いはしないネ 掃除もちゃんとしているみたい」

「なにを チェックしてるんだよ おとなしく座ってろよ」

なののちゃんはリュックから手帳みたいなものを取り出して

「これっ お土産 お金も無かったし これっ きれいだったからあげる」と、手帳の間に挟んでいた紅葉を取り出していた。

「そうかー 真っ赤できれいだね 大切にするよ」

「うん なな こんなことしかシュウ君にしてあげられないから・

・  
」

「いいんだよ 気使わなくて そんなこと・ 僕は君が元気でいてくれれば、それでいいんだよ」

「ありがとう ななネ シュウ君に出会ってから 毎日が楽しい 生きているって感じがする」

「そんな 大げさなもんでもないだろー なののちゃんは笑ってれば可愛いんだから」

そして、しばらく僕の本棚を物色して、取り出しては読んでいた。

僕がお米を研ぎだすと

「ねえ 晩御飯？ なに食べるん？」

「ああ 牛丼の素カナ」

「ふうーん 野菜は？」

「そんなものは無いなあー」

「野菜もとらなきゃーあ 身体に悪いよ」

「わかってるよ 今日のはたまたま無いの！ あのさー そろそろ帰らなきゃーナ 暗くなる前に 送って行こうか？」

「いいの！ まだ 帰りたくないなあー もっと 居ちゃーだめ？」

「ダメ！ お母さん 待ってるよ」

「そんなこと ないと思うけどなー ねえ なな 明日 学校お休みなの 来てちゃあダメ？」

「何言ってるのーお そんなー」

「ねえ お願い なな 行くとこないの お掃除しといてあげる  
ねえ 鍵！ でないと 帰らないよ」

僕は、戸惑いながらも、どうでもいいやーと、スペアの鍵を渡して、途中まで送って行った。でも、小悪魔的な女の子に引き込まれていたのかも知れなかった。

次の日、僕は仕事を終えて、急いで帰って行った。部屋に入ると、やっぱり彼女は居て、キッチンのテーブルにうつぶして、うたた寝していた。今日は、髪の毛を留めていないようで、サラサラの長い髪の毛が乱れていた。絵を描いていたのか、途中のまま、どうやら、修学旅行でいった厳島神社の光景を思い出しながら描いているみたいだった。

僕が傍に立っても気が付かない様子で、衝動的にその髪の毛に触れると、ビクツとして

「あっ あー 私 寝てしまった お帰りなさい」

「お帰りなさいじゃあないよ 不用心だろー 独りで居る時は鍵ぐらい掛けときなさいネ」

「あっ そうか なんか 安心してしもたー でも ちゃんとお風呂とお便所 掃除しておきましたよ 旦那様」

「あんなー・・・ なのちゃんは・・・ まあ いいやー」

「冷蔵庫に白菜のお漬物入れておいたの 家から持ってきたんだけど おいしいよ」

「おっ それは ありがたいけど なののちゃん そんなこと気使

うなよー」

「いいの いいの こんなものしか無かったんだけど シュウ君に食べて欲しいから なぁ ながが 来てたら迷惑やろかぁー？」

「いや そんなことはないよー 君が居ると楽しいよ ただ まわりからしたら 変に思われる」

「そんなもんなんだー ながは シュウ君に迷惑がかからないように 目立たないようにするから ここに、置いてよー」と、訴えるように・・

彼女は長いまつ毛の奥が潤んでくるような眼で見つめてきた。その時、僕は、衝動的な気持ちを抑えながら

「そんな悲しそうな眼をするなよー 追い出すようなことはしないよ 君は笑顔でいるほうが可愛いよ」と、言うのと、途端に僕にとっでは天使のような笑顔を見せてきた。だから、やっぱり突き放すようなことは出来ないし、彼女が来るのを心のどこかには期待している部分もあるなど思っていたのだ。

その後も、描いていた絵の説明をするなのちゃんの、時々、髪の毛を耳の後ろにかきあげるしぐさに、僕はどきどきしながら聞いていたのだ。辺りも暗くなってきたので

「もう 暗くなるから帰りなさいよ 送って行くよ」

「いいの 目立たないように帰ります ありがとうございます 明日は、公園にいくね」と、帰って行ったのだ。

冬に向かって、なののちゃんは僕のマンションにちょこちょこと来ていた。寒い日だったり、雨の日もあったので仕方ないかなと僕も思っていたのだ。

そして、彼女が冬休みになって、僕が年末から正月の間は実家に帰るからと伝えると、例のように悲しそうな眼をしていたのだ。だから、僕は彼女を楽しませようと思い、クリスマスの日にご飯を食べに行こうかと誘ってみた。彼女は一瞬、困った様子だったが

「うん 楽しみ 連れて行ってくれるん？ 行きたい」

「そうか 帰り遅くなるけど お母さん 大丈夫かな」

「そうだね ここみ先生に誘われてるからって 誤魔化すよ」

「うーん あんまり良くないけど 僕となんて言えないよねー」

「ウン だけど ななもお母さんに誤魔化されているから ええねん」

当日、僕は半日休みをもらっていて、なののちゃんは途中の乗換駅まで先に行っているはずだ。降りたホームで探すと、直ぐにななのちゃんは駆け寄ってきた。

「シュウ君　ななは心細かってんヨ　会えるんか不安やったから」

「あっ　すまん　同じ駅から、乗るわけにいかないから」

僕たちは、まだ少し離れたまま京都駅に向かった。ななのちゃんはダウンコートにすり減ったような運動靴にいつもの短パンで来ていたのだが、僕は予想していたので

「ななのちゃん　僕からのクリスマスプレゼントするよ　洋服選  
びに行こう」

「ええー　うれしいけどー　そんなのシュウ君に悪いよー　クリスマスのご飯だけで十分」

「いいんだよ　ボーナスも入ったし　ななのちゃんの可愛い洋服も見たいんだから」

遠慮して、しぶしぶ付いてきているなのちゃんを連れて、子供服売り場を見て、黒っぽいけど厚手の生地で花柄が可愛いワンピースとベルト付きの黒靴にソックスを選んで揃えた。そして、髪の毛を留めるリボン飾りも……。その場の着替えルームを出てくると

「シュウ君 なな こんな初めて 変じゃあない？ 可愛いのー？」

「ああ 可愛いよ とっても 似合うじゃあないか」と、僕が応えようと、とたんに笑顔になって、その場でスカートを広げて回って見せていた。僕は、その可愛い笑顔にホッとしていたのだ。

駅ビルの上にあるレストランに向かっている時、彼女は僕の腕にまるですがりつくようにして歩いていった。京都タワーが窓越しに見えるレストランに入って席についたのだが、彼女は

「うー 嫌 こっち」と、僕の隣の椅子に移ってきて肩を寄せてきていた。

僕は、ビールを飲んでいたのだが、なのちゃんはジュース類も要らないと言って、お水を飲んでいたが、いろんな料理を頼めるので感激しながら食べていたのだ。

「おいしいよー こんなの初めて ななは シュウ君にこんなの作れるようになりたいなあー」

「うふっ そうかい 大きくなったらな 期待してるよ」

「だいじょうぶー 来年は中学生だよ」

食事の後は、辺りが暗くなってスカイウォークを歩いた。なのちゃんの腕を抱き抱えるように歩いていて

「すごい きれい すごいねー ねえ ここって恋人同士で来るみたいやねー 私達もそう見られてるのかなー」

「それはないと思うけどー なのちゃんが可愛いんで 振り返る人もいるかなー」

「そう？ ななね こんなに幸せなことって良いんだろかーあ サンタさんも羨ましがってるよネ きっと」

それから、大階段のネオン飾りを見て、帰りの電車に乗った。

「シュウ君 ありがとう なな 本当に幸せ！ 生まれて初めてこんなにうれしかったことなかったんだ」

「そうか 喜んでくれて 良かったヨ」

「私のサンタさんはシュウ君なんだネ」

「そうかい？ 恋人じゃあないんだ」

「そんなことないよ シュウ君が子供扱いするんやんかぁー ななは・・・」

「まあ 可愛い妹みたいなんだよ 僕にとっては」

「すぐ はぐらかすうー そうだ 私 こんな恰好で帰るわけにいかんやんかー シュウ君チで着替えさせてーなー」

「そうかー 疑われちゃうなー でも せっかく可愛いのにネ また 帰り遅くなるけどいいの？」

「うん 嫌味言われるだけやー」

部屋に入るとベッドのほうで来ていたワンピースを脱ぎ出して、ついでに買った起毛のオーバーパンツも脱いで、僕に向かって

「シュウ君 明日 これ お洗濯に来るから置いて帰るネ お母さんに見つかるよバイから」と、キャミソールは着ていたものの下は前のところに赤いリボンのついた白いパンツのままだった。

「あぁー うん まあ 隅のほうに置いときなよ 早く、着ろよ 寒いだろう」と、言ったけど、子供とはいえ、こっちがドキドキしていた。

あまりにも、遅くなったので、断ってる なのちゃんを言い聞かせて、近くまで送っていったのだった。

正月休みになったのだが、実家に帰るのは明日にして、今日はなのちゃんと過ごすという約束をしていた。僕は、初めての賞与をもらっていたので、父母に何かプレゼントをと思っていたので、正月の間に実家に帰ると言ったら、なのちゃんは悲しそうな顔をしていたので、帰るのを1日伸ばしていたのだ。

朝9時頃、なのちゃんは顔を出したのだけど、僕はやっと起きたとここで、ベッドに座って、ボーっとして、今日1日、彼女とどう過ごそうかと考えてるところだった。

「おはよう シュウ君 サブいよ今日も」と、自分の腕を抱えるようにしていた。

「あっ まだ エアコンもつけて無いんだ」と、立とうとすると

「顔 シュウ君が温めてー」と、僕のお腹に顔をうずめて抱きついてきたのだ。

僕の眼の下には、今日は留めていない長い黒髪がかかった小さな肩があった。確かに、冷たいものを感じていて、しばらくは、その頭を抱くようにしていたのだが、僕は股間に変化を感じ始めて、ようやく顔を持ち上げて、彼女のほっぺを両手ではさんで

「もう 温まったかな お嬢ちゃん エアコンつけるよ」

「うーん 気持ちよくて寝ちゃいそうだった シュウ君の手も温かい」

その後、お昼ご飯の話をして、なのちゃんが作ると言ってきた。それで、一緒には行けないので、僕が買い物に行くことになって

「ナスのそぼろ和えとお豆腐のステーキ この前、京都で食べたやつ なな 作ってみる」

「そうか ナスにミンチと豆腐だな わかった」

「うん お味噌はあるの？」

「ああ あるよ」

「じゃあ なな ご米 炊いておくから」と、僕が出て行こうとすると、背中をはたくようにしてホコリを落としてくれていたのだ。

僕が、戻ってきた時、彼女は髪の毛を後ろに留めていて、掃除機をかけていてくれた。そして、以外と手際よく料理をして、食器のお皿が2枚しか無くて、それぞれのおかずを乗せて、ご飯は丼茶碗に入れた。

「ウン うまいよ なのちゃん やるネ」と、彼女と同じお皿を突っつき合って食べていたのだが

「うふっ 上手でしょ 私 才能あるのかも こうやっていると  
新婚さんみたいだね」

「・・・かもナ 奇妙な間柄」

「うー もぉー 奇妙じゃあないよ 普通だよ 今は 友達 ねえ  
食べたら 買ってもらったワンピースに着替えて良い？ だって  
着る機会ないんだものー」

「あぁ 良いよお」

彼女が食器を洗っている間に僕はクローゼットからワンピースを  
取り出してベッドの上に置いておいたら、洗い物を終えた彼女は、  
ベッドのほうに行って、いきなり服を脱いでいて・・・まるで、僕  
がいることを意識してない様子だった。今日は、半袖のアンダーシ  
ヤツに白にピンクの水玉のパンツで、丸っこいお尻を向けていた。

「どう やっぱり 可愛い？」

「うん 天使だよ」と、僕が応えると、彼女は笑顔を向けたまま、  
何にも言わなかった。

それからは、トランプをして遊んで夕方になっていった。そろそろ、  
なのちゃんが帰る時間になってきて、僕は、用意していたので

「なのちゃん これ 正月は会えないので お年玉」

「ええー いいよー そんなのー そんなこと してほしくない！」

「いいから 買いたいものだってあるだろー なんか」

「だって シュウ君にそんなことしてもらうわけには・・・」

「いいから 貰ってくれ なんか 必要になることがあるかもしれないから いうこと聞いてくれ」

「・・・ありがとう シュウ君・・・」と、又、長いまつ毛の奥が濡れてきているようだった。そして、ベッドのほうにいて、ワンピースを脱いで、そのままの恰好でハンガーに掛けてシワを伸ばすようにしていた。

「なのちゃん 先に服を着ろよー いくらなんでもー」

「なんでー ワンピース なの大切なものなんだもの」

「だからー パンツのままです」その時、僕は、初めて彼女の胸が小さく膨らんでいることに気がついていていた。

「あっ そうかー なの は べつにシュウ君の前やったら、こんな平気やー」

「あのなー なのちゃんは平気でも 一応 女の子なんやから」

「そう そうなんや」と、不満げに服を着ていた。

そして、帰る時、やっぱり送って行くというのを断っていて、玄関のドアのところまで、僕は、初めて彼女の眼に光るものを見た。だけど、彼女は黙ったまま振り返ることもなく飛び出して行ったのだ。

僕は、気になって、実家に帰る前にテーブルの上に（2日の夜には帰ってくるから、3日 又 お昼ご飯作ってくれ ゲームしよう）とメモを残していたのだ。

駅に着いて、実家にはぶらぶらと歩いて帰った。家に入るとかがみさんがお正月の用意で手伝いに来ていて

「秀君 いらっしやい 小さな彼女は置いてきたの？」

「あのかなー 彼女じゃあないよー」

「ふーん ほったらかしにすると誰かに奪われちゃうから」

「なんだよー その言い方 けしかけるようなことばっかー」

「ふふっ ねえ 私 何か変わったと思わない？」

「うっ オバン臭くなった？」

「秀君のお餅には唐辛子いれようか？ うふっ あのね お腹 ちよっと膨らんでるでしょ」

「あっ あー 出来たのかーあ へえー かがみにもなあー 一応 女だったんだなー」

「秀 かがみさんは あんたのお義姉さんなんだからね 気をつけなさい」と、母が・

「そうよー 秀君のお姉様よ おめでどうの一言ぐらい」

「そーだな おめでどう あっ それと ななのちゃんのことありがとう 喜んでいたよ 一緒に寝てくれたって」

「そう 可愛い子よねえー 又 連れておいでよー ねえ お義母さん？」

「そーだね いい子よねー だけど まだ 小学生なんだよねー」と、母も意味ありげにため息をついていた。と、玄関に飾っているななの絵を見ていた。

その晩は兄貴夫婦も来て、一緒に晩ご飯を食べていた。近くのスーパーで寿司盛りを買ってきたみたいだった。

「兄貴 ベイビー おめでどう」

「ああ 6月くらいカナ 男の子らしい」

「おおー 跡継ぎかあー お父さん 良かったなあー」

「ああ でもな 椎茸だけだと先が見えないからな 今 行者茸とか自然薯もやっとなる なんとか ものになるといいけどー」

「そうかー 大変なんだなあー 兄貴も」

「そうだよ なんとか 続けていかないとなー」

「でも かがみさんが来てくれて、助かってんだよ よく気がついて、働いてくれるし ほんと いいお嫁さんよ」と、ようやく片付けの終わった母が言ってきた。

「お義母さん そんなー 私こそ よくしていただいて 幸せです」

僕は、高校時代のがさつな かがみと違って、あぜんとしていた。女って環境によってこんな変わるんかと思っていた。

元旦になって、お雑煮を食べて、椎茸を焼いて食べていると、兄貴夫婦が挨拶にやってきた。僕は、父ともう酒を酌み交わして、かなり飲んでいたのだが、かがりさんが横に来て

「秀君 なんのちゃんのこと あの子 真面目に秀君のこと好きみたいだから いい加減につきあっちゃあだめよ」

「かがみさん 酔っているんかよー いきなり なんだよー」

「バカ 私 赤ちゃん居るのよ お酒 飲むわけないじゃあない君のことを思っ」

「そうか わかってるよ だけど 難しいことがいろいろあるんだよー へたなことは出来ないしー」

「まあ 迷ったことあったら 相談に乗るよ お姉さんなんだから」

僕は、その後、酔いがまわってきて、なんなんだあいつは・・・  
確か、高校の時は僕のほうが勉強は出来たはずだがと思いつながら、  
寝てしまったようだった。

米、野菜、そして椎茸を持たされて、それに幾らかの食器を持って、僕の寢床に帰ってきたのは2日の夜だった。そして、テーブルの上に眼をやって・・・絵が置かれていた。あの日の京都駅の大階段の絵。そして隅のほうに

（あの人は幸せをくれる 私もある人に幸せを返せるようになりたい たった3日なのに寂しい） と・・・

僕は、涙が滲んできていたが、絵を眺めていると、階段の真ん中には、なのちゃんと僕が腕を組んで笑っているような二人が描かれていた。そして、涙が滲みだしてきていた。

その時、僕は、そばにななのちゃんが居たなら、きっと抱きしめていたんだろう。頭の中では、女なのも子供なのも関係ないと思っていた。いつの間にか、彼女は僕の心の中に住み着いていたのだ。

その夜 僕は、変態と思われても構わないと あのワンピースを抱きしめて寝ていたのだ。

次の日、僕は、まだ、うとうととしていたのだが、急にベッドの僕の上に飛び込んできて

「シュウ君 元気？」と、ななのちゃんの声だった。鍵を開けて入ってきたのだろう。

「なんだよー びっくりするじゃあないか」

「うん だって 寂しかったんだものー」

「だけどさー こんなの 恋人同士なんかができることじゃあないかー」

「ふうーん 恋人同士じゃあないと しちゃーいけないの？」

「いや そんなわけじゃあないけど ななのちゃんは・・・その・・・」

「ななのちゃんは なんなの？」

「まあ・・・ 妹みたいな女の子？」

「なんなの それっ 変なの」と、離れていってくれた。

その時、僕は彼女も迷っているんだと思っていた。僕への気持ち。

そして、僕がすっかりしないといけないんだとも問い詰めていたのだ。

「今日のお昼はネギ塩豚とほうれん草の卵とじ 材料買ってきてるから・・ ねえ なんで私のワンピース ベッドにあるの？」

「えっ なんでカナー 整理した時 紛れ込んだカナ」

「ふーん 変なの ねえ 今日も 着てていい？」

「あっ あぁー 良いよー」

早速、来ていたトレーナーを脱ぎ出して、平気で着替え出したけど、僕はそっちを見ないようにしていた。そして、今日は髪の毛を花の髪飾りで留めていた。

なのちゃんの作ったものは、不思議とおいしかったのだ。この子は料理に関しては才能あるのかも知れないと食べていたら

「お母さんのお料理って おいしいんでしょ？」

「うーん だけど なのちゃんのもおいしいよ」

「そう？ やりがいあるなー そー言ってもらえると お嫁さんになれるカナー」

僕は、この子が時々言う小悪魔的な言葉に惑わされているんだ。



休み明けの初出勤の日だったが、グラウンドもじめじめして、借りる人も居ないので、暇な一日だった。部屋に帰るとななのちゃんが待っていた。

「お帰り シチュー煮込んでいたんだあー シュウ君の晩ご飯にと思って」

「それはありがたい けど ななのちゃん 昨日も買い物してくれてるし 使わせてるネ 払うよ」

「いいの お年玉くれたじゃない」

「それはそれ！ お年玉は君が欲しいものに使いなさい」

「だからー 私の欲しいものは シュウ君のためになるものにー」

「だけどー ちょっと 違うんだよなー 例えば ゲームとか洋服とか」

「いいの ななは 洋服も着て行くところないもん あっ スケッチブック 新しいの買ったの」

「そうか それはそれでいいけど 今後のこともあるし ななのちゃんに 幾らか預けておくよ 僕のために使う用 無くなったら、

又、言うことネ　でも、あんまり高いものは買わないこと」と、戸惑っているななのちゃんに5千円を渡していた。

「じゃあ　わかった　私　お嫁さんになる勉強だね」と、大切そうに何かの袋にしまっていた。

「ななのちゃん　財布無いのか？」

「うん　持ってない　お金持つこと無かったもん」

僕は、しばらく考えていたけど、適当なものが無かったので、自分の財布を空にして

「とりあえず　これを使いなさい　明日　ななのちゃんの使いやすそうなの　買ってきなさい　この範囲内で」と、又、2千円を渡していた。

「うん　なんか　ななは　シユウ君に迷惑ばっかー掛けてんネ」と、又、悲しそうに下を向いていたから

「そんなことは無いよ　僕は　こうやって　ななのちゃんが来てくれているのって　うれしいんだよ」

「ほんとー　ななも　シユウ君と一緒に居られるのって　しあわせ　明日も、なんか作って待ってるネ」と、笑顔が戻っていた。

「そうか　もう　公園に行かないの？」

「うーん 寒いし ここのほうが安心できる だめ？」

「いや べつに 構わないけど ここが良いのなら それで良いよ」

僕は、心の底では、罪悪感を覚えていた。なんか、なのちゃんと一緒に居ると、いつか 自分が悪魔になってしまうんじゃないかと恐れていたのだ。

そんな調子のまま、なののちゃんは小学校の卒業式を迎えていた。その日、僕は仕事に来ていたのだが、昼過ぎになって、なののちゃんが訪ねてきてくれた。

紺のワンピースに胸に桜の花飾りを付けていた。そして、髪の毛はいつものようにまとめなくて、左の耳の上にキラキラ光った髪留めをつけていた。

「どう シュウ君 可愛いでしょー お母さんに買ってもらったの卒業したよ」

「へえー 可愛いねえー 少し 大人になったんだ」

「うふっ 少しネ もう 帰るね シュウ君に見せたかっただけだからー 明日 行っとくね お祝い しようね」と、スカートを翻して行ってしまった。

「だけど、僕は、良かった 彼女が嫌っていたお母さんも出席してたみたいだから・・・と。」

次の日、仕事から帰ると なののちゃんが居て

「おかえり ご主人様 お疲れさまでした」と、正座して迎えてくれたのだ。

「やめろよー　なのちゃん　そういうのって　悪ふざけだよ」

「そうかあー　こういうのって　シユウ君　嫌いなんだ」

「うん　なんだかなー　なのちゃんだから　そんなことさせたくない」

「ふうーん　今日は　ちらし寿司　作っておいたのよ　冷蔵庫に肉そぼろと卵そぼろ入れてあるから、乗せてね　シユウガもあるし　明日のお弁当の分もあると思う」

「んうー　なのちゃんは？」

「なのは　さっき　ちょっと　食べたよ　お先で　ごめんなさい」

「いや　それはいいんだけど　せっかくなのに食べて無いのはないって思っただけ」

そして、僕は用意していた卒業祝いものを取り出して

「なののちゃん　卒業おめでとう　僕からのお祝い」中はボールペンとシャープペンシルだ。

「わあー　ありがとう　なにー　開けていい？」と、なののちゃん　は箱を開けていって

「シュウ君 ありがとう 大切に使うネ 私 勉強するね 中学い  
ったら シュウ君のためにも」

「ああ それはいいけど 僕のためじゃあなくて 自分ためだろー？」

「どっちでもいいやんかー シュウ君のためってことはー 私のためよー」

「昨日 お母さんも来てくれて、お祝いしてもらったの？」と、聞いてみたが・・・なのちゃんは、下を向いたまま何も言わなかった。僕は、しまった また、余計なことを聞いてしまったと、後悔していた。

学校が休みになった　なのちゃんも公園に絵を描きに来ていた。そろそろ温かくなってきたので外に出てきたのだろう。

お昼頃には確かに居たはずだったけど、僕が仕事を終えたときには姿が見えなかった。帰ったのかなと部屋に着くと、なのちゃんが居たのだ。

「おかえりなさい」と、元気な声で迎えてくれた。

「ああ　少し、びっくり　家に帰ったのかと思ったから」

「ううん　だって　晩ご飯の用意してたから・・・今日は　肉じゃが　食べる前に少し温めてね　それと卵サラダ　冷蔵庫ね　お米研いであるから」

「うん　ありがとう　でも　なのちゃん　そんなに毎日はいいよー　ずーと　絵を描いていても・・・」

「いいのー　こうやってる方が　しあわせ　迷惑？」

「いいやー　ありがたいけどなあ　今度　僕が休みの日　どっか　遊びにいくのか？」

「わあー　いい　いこう　いこう　どこ？」

「うん 京都 動物園と水族館 どっちがいい？」

「そうだなあー 水族館がいい 楽しみだなあー」

「よし 水族館な 今度は夕方には帰ってこようネ」

「うん でも水曜日でしょ？ 木曜と金曜はダメだけど それ以外はお母さん帰ってくるの 9時すぎなの だから、少しくらい遅くなくても大丈夫だよ」

「そうなのか じゃあ ななのちゃんはひとりでご飯食べてんの？」

「ううん シュウ君ちから帰るでしょ それから ウチのご飯の用意してお母さん 待ってるよ それまで、洗濯して、お風呂は先に済ませちゃうけどね」

「感心だね ななのちゃんはー」

「そんなことー 平気だよ シュウ君 あのねー」

「うん どうした？」 ななのちゃんが暗い顔して、下を向いていたから・・

「なんか 話があるのか？ いいよ 言ってごらん」

「あのね 私 卒業式の時ね お母さん来てくれなかったんだよ

でも、働いてくれるからしょうがないよねと私 晩ご飯作って、待ってたんだ 夜ね 遅く お母さんが帰ってきた時、お酒飲んでみるみたいだった 私 悲しくなって 言ってしまったんだ 知らない男の人 家に入れるのも、もう、やめてー 嫌なのって したら お母さんが怒ってしまって 子供にはわかんないのよ、何も知らないのに親に意見するなって・・・ 私 そんなつもりじゃあ無かったのにー 意見だなんて」と、長いまつ毛から涙が落ちてきていた。

その時、僕はその小さな肩を初めて抱きしめたのだろう

「なのちゃん お母さんは、君を育てて守ろうと必死なんだよ 卒業式のワンピースも用意してくれたんだろう？ 君が考えているようなことじゃあないかも知れないよ 苦労して、色んな事情があるんだと思う 君は言ってくれたよね ここに居る時がしあわせだって 僕が力になれることがあったら協力するから そのまま 君は明るく真直ぐに生きていくんだよ」

とたんに、なのちゃんは、もっと激しく声をあげて泣いていた。ようやく、収まったのか、顔をあげて僕を見つめてきた。まつ毛も濡れていて、僕は完全に女として意識してしまっていた。その可愛い唇に吸い付きたいと衝動的に・・・あっ だめだ この雰囲気はーと

「あっ 肉じゃがは レンズでいいのかなー」と、なのちゃんの肩を離して紛らわせていた。

当日は、やっぱり、乗り換えの駅で待ち合わせをして、なのちやんは卒業式に着ていたワンピースで来ていた。だけど、僕がクリスマスの際にプレゼントした靴を履いていた。

京都駅から歩くのだけど、彼女は僕に腕を絡ませるようにして手を繋いでできていた。そして、時々、僕の顔を下から見上げてくる顔がすごく可愛らしかったのだ。

なのちやんはオットセイと京都の海という水槽のマイワシに興味を示していて、ずいぶんとそこに立ち止まっていた。だけど、ずーと僕の手を離さないで、ワァーと声を上げながら見とれていたのだ。

出てきた後は、お昼を回っていたのだが、清水の坂を歩いてみたいというので、地下鉄に乗って、しばらく歩くのだが四条通を歩いて、途中の洋食屋さんでお昼ご飯にした。

「なかなかフライものはシュウ君に作ってあげれないからね」と言っていたのだ。

僕は、サラッと僕のことを思ってくれている彼女のことを嬉しかった。だから、ふたりともクリームコロッケと海老フライの定食にしたのだ。

「おいしいー やっぱり レストランはちがうネ」と、なののちゃん、ほんとうにおいしそうにほおばっていた。

「あのさー 私 清水寺は入らなくてええねん 行くまでの道をシユウ君と歩きたいだけなんや」

「そうなんか 歩くだけ？」

「うん 歩くだけ 腕 組んで 仲のいい カップルみたいやろー」

「カップルに見えるかなー」

「なんでも ええねん カップルでも お兄ちゃんと妹でも 新婚さんはちょっと無理カナ」

そして、食べ終えて、八坂さんを抜けて、ぶらぶらと歩き出していた。途中、いろいろな店を覗きながら、彼女も「可愛いね きれいね」とか言っていたもの、それを欲しがる様子も無かったので、僕は、組紐でできた髪留めの飾りを選んで、彼女に買っていた。

「シユウ ありがとう 可愛い」と、その場で髪留めを付け替えていた。その後は、跳ねるように歩いていて

「ねえ シユウ この辺りを歩いている人の中で、誰が一番 しあわせな気持ちだと思う？ それは ななよね」

「そうか それはわかったからー そんなに大きな声で言うと 逃

げてしまうよ」

「そうか しあわせは自分だけで感じるものだね だけど、私は  
シュウにも伝えたい」

「僕は なのちゃんが しあわせそうな顔をしていると わかる  
よ」

そして、帰りに駅に着くときは離れていたのだけど、急に傍に寄  
ってきて、別れる時に

「・・・いやだ ちゃんってー だからね 私のことを・・・なの  
って」と、ポツンと言って走って行ったのだ。

次の日も晴れていて、ななのちゃんは公園の芝生で絵を描いていて、昨日、買った髪飾りをしていた。僕は、仕事の合間に近寄って行って

「やあ 良い天気になったね」

「うん 気持ち良いよ 昨日 ありがとう 楽しかった」

「そうだね ななの それ 可愛いよ」僕は、抵抗なく ちゃん付けをやめていた。

「えっ うん 可愛い？ シュウ ななは もう直ぐ ご飯を用意して、お帰りをお待ちしています」と、笑顔を向けてきていた。

家に帰ると、飛び出してきてくれて

「今日はネ イワシ団子 作ってみたんだけ」

「へえー そんなの よく 作れたな」

「ウン お魚 買う時にね 骨とか取ってもらってネ 包丁で細かくして、卵と小麦粉を混ぜて、焼いたの 後は、大根と油揚げを煮たやつ」

「そうかー 色々と考えてくれるんだなー なのちゃんは」

「うーん ううーっ ちゃん？」

「いや なの だね」

「よーしっ 私ね 家にお料理の本 あるから 見てるんだあー」

「そうか でも それで作れるんだから なののは たいしたもんだよ」

「なんといっても シュウのためだからネ でも、本当はネ シュウに作りたてを食べてもらいたいんやー いつも 温めさせてゴメンネ」

「そんなことないよ いつも おいしいよ」

なののちゃんが帰った後、本棚の隅に置いてあるノートを見ると、びっしりと細かく丁寧に書き込まれていた。彼女が家計簿代わりに使っているものだ。その日、買ってきたもの、金額と残金。その横のほうには、その日の料理と余ったであろう食材の量。ポリ袋にはレシートの束。冷蔵庫を覗くと、ラップとポリ袋に包んで入れてあり、冷凍のほうのものには日付と食材名を書いて整理されて並べられていた。

確かに、僕もなのちゃんが来てくれるようになって、だいぶ食費が減って助かっていたのだ。

僕は、改めて 彼女が描く絵と同じように、丁寧な性格に感心して  
いて、もしかすると貴重な原石なのかもと考えさせられていた。

ななのちゃんの入学式の前の日。僕のマンションのほうに来ていて、僕が帰るとお風呂の壁とかを掃除していてくれた。

「あっ 靴下 汚れてない？ そこ さっき磨いたところだから、気を付けてね」

「えっ うん 汚れてないよー ななの なんか こうるさい嫁さんみたいだなー」

「だって 明日から中学やんかー なな あんまり 来れんようになるかもしれへんしなー きれいに掃除しとかないと」髪のをまとめて上にあげていたから、初めて、彼女のうなじを見て、大人っぽくなったように思えていた。

「そうかぁー いやいよ中学生かぁー」

「あんなぁー 明日 お母さんも一緒に行ってくれるって」と、ニコニコしながら言ってきた。

「そう よかったなぁー ななの すごく、嬉しそうだよ」

「うん 私ね この前 お母さんに言い過ぎたと思ってたの お母さんも言い過ぎたと思ってたみたい 卒業式の時 さみしい思いさせてごめんねと謝ってきてくれたの それでね ななのがもう中学

生になるから、嫌がるようなことはしないようにするって、約束してくれたの」

「そうかー それは良かったネ」

「あのね 明日 式が終わったら お母さんがお祝いにご飯食べに行こーって だから、シユウに 制服着たところ見せれないの だから、あさってネ」

「ああ ああー そんなの気にするなって 楽しんでおいでよ」

「うん でもね これから もっと お金に不自由させるかも知れないからごめんねって だけど 私はそんなの構わないんだー これから・・・お母さんと一緒だから」と、言っている彼女には暗い影もなかった。

「だけどね 中学生なんだからって 少し、大人っぽい下着も揃えてくれたの 見たい？」

「バカ そんなのー 見せる奴がいるかー」

「でも シユウだったら平気なんだけどなー」

「なの の からかってるんだろー」

「うふっ ちょっとネ からかってみたかったのー だって いつも 子供扱いなんだものー」

「このー」と、僕が彼女の頭をコツンとすると、彼女は舌を出して「べえー」と可愛いらしい顔をしていた。彼女が心からはしゃいでいるように見えて、僕は安心していたのだ。

僕が事務所に居るとななのちゃんが訪ねてきて、玄関ホールから手を振ってきた。

「学校 終わったの？」グレーのブレザーに襟元は赤の細いリボンにスカート姿だった

「うん シュウに見て欲しかったん 似合う？」と、僕の目の前でくるりと回って見せてきた。僕は、事務所の女の人もこっちを見ていて、視線を感じていたのだが

「ああ 立派な中学生だよ」と、言ったものの今までと違って、スカートもまだ大きめなのか、ずいぶんと長いもんだなと思っていた。

「あっ やっぱりかー」と、ななのちゃんは急に言い出して、しばらく下を向いて、じいーっとしていたが

「ねえ シュウ あんなー あそこの女の人に話していい？」

「ああー べつにいいけどー 何？」

「うん」と、言いながら事務所の中に入って行って、30代後半の事務員の高沢さんの横に行って、小さい声で何かを話している様子だった。そして、奥のロッカーから小さなものを受け取って、ななのちゃんは高沢さんに頭を下げていた。

「一緒に行かなくて大丈夫？」と、高沢さんは声を掛けていたけど「大丈夫だと思います」と、なのちゃんは急いでトイレのほうに走っていた。

僕が高沢さんの顔を見て、何か聞きたそうにしているから、高沢さんは

「急に来ちゃったみたいなのよ！ 北番君には関係ないから・・あんまり、聞かないでやってネ あの子 知り合いなんですよ よく、一緒に居るよねー」

「えっ ええー 親戚の子」

「ふーん 可愛いわね」と、ふふふつと言いながら、席に戻って行った。

なのちゃんが出てきて、高沢さんに頭を下げて、僕を外に引く張るようにして

「あのね アレ 急に来ちゃったの 油断してたの 私 持ってなかったから あの人の人をお願いしちゃった」

「ふーん アレ？」

「うん もういいの！ あのね 今日は帰るね あした シュウの

とこに行ってるから」と、新しい通学用のリュック背負ったかと思  
うと、手を振りながら長いスカートを翻して帰って行った。

それから、なののちゃんは、しばらくは学校帰りに僕のマンションに来ていて、晩ご飯の用意をしていてくれた。

「なの もう ご飯の用意はいいよ 来るのはいいんだけど、ウチに帰っても、ご飯の用意してるんだろー？ 来てもいいんだけど、勉強に時間あてろよ」

「ええーっ やだあー 私 それっくらい出来る それに、今は通学の途中にあるもん 寄り道じゃあないよー シュウのために なんかしたいの」

「それは ありがたいんだけど なののが勉強に打ち込んでくれたほうが嬉しい 中学になると いっぱい新しいことやんきやなんないだろー だから」

「・・・来ちゃあ だめなの？」

「うーん だって もう 気にしないで 家に帰れるんだろーう 言っちゃいけないことだと思うけど・・・だったら、来る理由ないだろー」

「・・・来る 理由あるよー なのは シュウと同じ空気吸いたいし、シュウの匂いを感じていたい だって、帰ってもお母さん仕事に出てるし、ひとりぼっちなんだよ」

「・・・なの・・・でも　ここでは、勉強の時間にあてろ」

「わかった　じゃあ　ご飯作るのは　土曜と日曜だけにする　だったらいいでしょー？　じゃあないと　シュウ　私の愛情こもったの　食べれなくなるんだよ！」

「・・・なの　又　からかい始めてるだろー？」

「そんなことないよ　私　ちゃんと　思ってるから　それにね　自分のこと　ななって　やめた　子供っぽいし　もう　中学生なんだから」

「そうか　無理すんなよ　これから部活なんかもあるんだろー？」

「うん　だけど　クラブって　お金かかるじゃん　私　なんにも入らないつもり　私の部活はシュウとの時間」

「あのさー　あそこのセンターで地元の少年サッカーがあるんだよ　土曜日に集まってる　なの　入らないか　女の子だけのグループもあるんだよ　小学生と中学生」

「あぁー　ダメ　私　運動なんて出来ない　それに　サッカー？　そんなのやったことないから」

「だけど　みんな　何でも初めてってあるじゃあないか　ちょうど　今　中学から始めるって子も居るみたいだよ　やってみようよ」

「なのの 走るのは速そうだよ」

「だってさー 怪我 したくないもん ボール追っかけてって 犬みたい」

「一度 やってみればー 補助金もあるから、そんなにお金負担ないよ それに、そんなの僕がなのの為だったら出すよ、僕は、なののがグラウンド走り回ってるの見てみたい ダメかい？」

「・・・ほんと？ 見たい？」

「ああ きっと 君は 全日本になる素質ある」

「シュウ アホちゃう？ でも 考えとく ながが犬みたいにボールを追っかけてるとこシュウが見たいんならネ でも 私 他人と話すのとか集まりって苦手なんやなー」

次の日、帰ってみるとななのちゃんがテーブルに座って勉強しているみたいだった。

「お帰りなさい 今ネ 今日の学校のこと 復習しててん」と、彼女はジャンパーの上着に下は運動用のハーフパンツのジャージ姿で玄関ドアまで迎えに出てきた。

「ああ この恰好？ だって制服シワになるやろー だからー 着替えてん 学校行くときもね スカートの下は これ 穿いていくネン」

「そう 今は そんな色気ないのん 下に穿いてるのが普通なんやのー」

「なんなん？ シュウでも見たいんかあ？」

「そんなこと言ってないよ 見たいとかじゃあ無くて 見えるかなって ドキドキするのがええんやー」

「やっぱり 見たいんやー」

「違う！ って 時代が変わるんやなーって 僕らの頃は 女の子は競ってスカート短くしてたし 別に 見えたて普通やったからな」

「ふーん それを懐かしがって おっさんが 盗撮とかするんや」

「うーん それは別の問題カナ まあ いや どうだい？ 慣れた？」

「うん まあネ 隣の席の ナナコちゃんと仲良くなっちゃった 名前似てるやんかー 話し掛けてきてくれて 直ぐにネ」

「そうか 良かったなー どんどん 友達増やすといいよ なののは 明るいんだから」

「そんなことなかったんだけどネ シュウに会ってから・・ 神様がきつと シュウと結び付けてくれたんだー なのこと 憐れんで」

「また そんな風に言う 君が引き寄せたんだよ 良い子だったから」

「なあ 私 シュウの言っていたクラブやってみる あのなー クラスのリョウって子 始めるって言ってたし 一緒にやろうって誘われたの」

「そうか じゃあ クラブの監督に話しとくよ 僕の知り合いの子 だって」

「うーん それもなー でも しょーがないかー 僕の彼女ですっ

てわけにいかんもんなー」

「こらー　ななの　また　からかい出したなー」と、僕は、可愛く  
なって彼女の頭を押さえてしまっていた。

僕はクラブの監督をやっている朝宮さんに相談していた。地元の建設会社をやっている社長さんで、大学までサッカーをやっていて、膝を痛めて途中で辞めたと聞いていた。

「僕の知り合いの子なんですけど・・・今年、中学生になりました、サッカーをすすめてるんですけどね。もちろん、初めてなんです。運動も・・・ただ走るの速そうなんですけど・・・学校では、何のクラブにも入らないって言ってまして」

「おお それは大歓迎だよ 今 女子のほうは小学生中学生併せて15人程なんだけど、今年中学1年の子が2人入ってな、これで3人になるわー 女子はまだ、練習ばかりで試合出来てないんだ。今年は、出来ると思う」

その後、僕は朝宮さんに知ってもらっていた方が好いと思って、なのちゃんと出会った時のこととか、お父さんが居ないことを話したのだ。

「その子 僕 知ってるわー 前はグラウンドの端のほうで絵を描いていたんや ボールがな その子の傍まで転がって行った時に・・・僕に向かって蹴り返してくれたんや 正確なパスでな びっくりしてもうてな それで、サッカーやらないかと声掛けたんや ーしたら 出来ません と答えたきり、黙ってしまって その次の日から あの公園の芝生に移動してしまったみたいやー 悪いこと

したなー」

「そうなんですか それでね さっきお話したような事情がありまして もちろん 会費とかは僕が面倒みますが、スパイクとかユニフォームは誰かのお下がりで無いですかねー 新しいのを僕が揃えると、彼女は気を使うと思うんですよ そんならだったら、やらないとか・・・」

「ユニフォームは、そんなわけで、まだ、無い 体操服みたいなんで、みんな練習してるよ 靴は誰かにあたってみるよ 育ち盛りだから 小さくなったのを持って居るかもしれんからー 北番君はその子の保護者替わりカナ？」

「えっ まあ 近いですけど・・・」

「なるほどなあー 北番君 大学でサッカー やってたんだってなうちのコーチやってくれと助かるんだがー」

「はぁ でも 僕は土日と基本的に出勤になってるんですよ」

「らしいな 仕方ないかあー でも 夢を捨てていた女の子を一步踏み出すようにしたのも事実なんだよ 他の子供たちにも・・・」

土曜日の朝、グラウンドにはクラブの少年たちが揃っていて、少し離れて、女の子達が。その中にななのちゃんの姿もあった。メンバーに紹介されている様子だった。並んでいるところを見ると、なのちゃんはそんなに背が大きい方では無いなと思っていた。まだ、小学生みたいなのだ。

朝宮さんをお願いしていたシューズは、今年、高校になって学校のクラブに入った子が小さくなって残していたものだ、手に入れてくれた。それを、なのちゃんに用意したものを穿いていた。

その後は何人かに別れてキックの練習をしていたみたいだけど、お昼前に朝宮さんのもとに行って

「どうですか　なのちゃん　緊張しているみたいだけど」

「ああ　初めてなのに　もう　周りに合わせてるよ　もともと勘がいいんだろうな　あの子は伸びるよ」

「そうですか　良かった　見てると　楽しそうにやっているし」

その時、なのちゃんは僕を見つけたのか、手を振ってきていた。それで、僕も振り返っていたのだ。

「北番君　君達は　仲が良くていい関係みたいだな」

「はぁ あの子が明るくなって 良かったなって思っています これから、もっと、活発になってくれればと 今までのぶんも」

「そうか 実は、僕も 彼女に期待している部分もあるんだよ なの横に居る背の高い子 リョウ やっぱり、初めてだというんだけどね あの子もセンスある この二人は良いよー 楽しみなんだよー」

「そうですか よろしくお願いします」と、僕は、とりあえず安心していたのだ。

その日、帰るとななのちゃんが部屋に居て、僕の晩ご飯の用意をしてくれていた。

「お帰り シュウ 今日 楽しかったよー あのね シャワー 借りちゃった」

「ああ 良いよー 走り回っていたみたいだものなー」確かに、Tシャツと短パンに着替えていた。

「うふっ 汗かいちゃった 今日ハンバーグね シュウが食べる前に焼いてから帰るから」

「えー 遅くなるやんか」

「いいの お母さんも帰り遅いしー」

「うーん じゃあ 送って行くよ 暗いし」

「いいの！ 私 走って帰る それに、焼き立て食べてもらわないと意味ないよー」

と言っていたけど、自分で焼けると言ってるうちに帰らせたのだけど、焼きあがったのは、表面が黒焦げになってしまったのだ。

夏も近くなってきた、なのちゃんはシャワーした後は、袖なしのワンピースを着るようになっていて、学校帰りの日でも袖なしのTシャツと短いスカートに着替えていた。

僕が帰ると部屋の中はムートとする日も多く

「なのの エアコンつけていいんだよ 暑いんだろう？」

「うーん 部屋に入ると もあーっとするけどね 窓開けてれば、少し風が入るからー 電気もつたいなんやかー 学校から帰ってくると汗だくなるねん 制服のスカート 長いやろー 暑いねん それに汗臭いと シュウに嫌われるからな」

「べつに嫌わないよ どうだい？ サッカーのほう 見てると楽しそうじゃあないか」

「うん 楽しい あのね 仲のいい ナナコも入ったんだあー それとねリョウは背も高いからってキーパーの練習もやってるんだあー」

「そうか 人数増えたみたいだね 女子も」

「そうだね 全部で20人くらい 中学生は9人」

「ふーん そろそろ 他のところと試合するんかなー」

「どうだろう 試合ってなると 怖いかなー ぶつかったり、蹴られたりするんでしょ？」

「それはないと思うけどなァー どうだか」

「でも、朝宮監督って 優しいよね 男の子には厳しいけどね」

「まあな 男って 女の子には優しくしてしまうんだよ 怖がらせるとどうにもなんないから」

「ふーん シュウもそう？」

「うっ ううん カナ」

「じゃあ 私に声掛けてきたのも？」

「うっ ウン カナ」

「・・・そうなんだァー ななが可愛かったからじゃあないんだァー でも シュウで良かったァー 私」

なののちゃんは夏休みに入ると、お母さんの仕事が休みだという木曜日以外は殆ど僕の部屋で過ごすようになっていた。だけど、キヤミソールにショートパンツのことが多くって、彼女はそんなこと意識してないんだろうけど、僕は戸惑うようになっていた。春から比べると背も伸びて、胸の膨らみも大きくなってきていたからだ。行き帰りにはその上にサマーワンピースを着てるんだけど、部屋に居る時は暑いからと脱いで勉強している様子だったのだ。

だけど、僕はあえて、そのことを言うと、余計に意識しているように思われるからと気にならない素振りをしていただけだ。さすがに、僕が休みの時は、朝から彼女の姿と暑さに耐えきれなくて、少し歩くんだけど、こどもの森は涼しいので、ふたりで出掛けようにしていた。それも、二人でお弁当を用意してピクニックのつもりで気晴らしだった。そして、ボールを持って行って、広場でパスの練習とかもしていた。

「シュウと初めてデートしたとこ あの時は楽しかったよー」

「そうか なのの あの時 はしゃいでいたなあー」

「だって 嬉しかったんだものー」と、僕の腕を取って絡ませてきていた。

彼女は、もう女としてのしぐさを自然と身に付けてきているんだ

と、僕は感じていた。だけど、僕にとっては、まだ子供なんだからと自分に言い聞かせていたのだ。

「なあ 暑っ 苦しいから 離れろよー」

「なんだァー 冷たい言い方！ 最近 シュウって 私に 妙に冷たいよね」

「そんなこと 無いよ なのは 可愛いと思ってるよ」

「そう カナーあ 部屋ん中でも なんか 私に近寄んないよーに してるみたい」

「それは なのの勉強のじゃましちゃあー いけないと思って」

「それだけ？」

「うん まあ」

「ふくん 複雑 私は・・・」

「バカ 僕だって・・・ あのさー 実家から また なののちゃんを連れておいでよって かがみさんも」

「わあー うれしい！ いきたいなあー」

「お盆の後なんだけどね 近くの祭りがある 花火なんかもやるん

だよ」

「うん いいねえー 行く！ 連れてってえー」

「かがみさんはな 10月に赤ちゃん 生まれるんだって だから、  
今度はあるまり面倒みれないかもって言っていた」

「そーなの じゃあー おじやまかなー」

「でも いいんじゃないか 連れておいでよって言ってんだから  
ウチの母も楽しみにしてるってんだから」

「お母さんにね シュウのこと話したんだ クラブでお世話してくれているお兄さんだって 私 すごく、その人に親しみを感じるって」

「そうかい お母さんは何て？」

「何にもー それでね お泊りの話 私 行きたいんだあーって お祭りの時」

「あっ そうかー 反対されたのかい？」

「ううん 何にも言わなかった だけど、一度会ってご挨拶したいって」

「そうか 僕も 一度 会ってご挨拶しておいた方がいいのかなって思ってた」

ある日、僕がグラウンドの木陰でお昼を食べて休んでいると、なのちゃんが女の人と共にやってきて

「北番さん お母さん」と、紹介されたのは、Tシャツにスリムなジーンを穿いていて、サラサラした髪の毛が長い人。お母さんというよりお姉さんといっても通用するかというくらい若く見えた。

「なのなの母です。この子がお世話になっているというので、一度ご挨拶をと思って」

「あっ」僕はその場で立ち上がった。「いえ お世話だなんて」と、なんて言っているのか、慌てていた。なのちゃんは公園のほうに走って行ってしまった。

「あの子 去年あたりから明るくなって・・きつと、北番さんにお逢いしてからですわ あの子の感受性が強い時に、私 事情があって、構ってやれなかったの そんな時に、北番さんに会って、きつと救われた気がしたんだと思います ありがとうございます」

「いや そんなー 僕は いつも一人で 絵を描いているし、丁寧な絵だったから 気になってしまって 最初は、お母さんに言われているからと、知らない人とは話しちゃあダメだって言われてしまっ  
て でも 素直な子で、徐々に打ち解けてくれて」

「あの子 お父さん居なくなっって・・ 寂しいんですよ 私 そんなこともわからなくなっって でも、私も 女一人で育てるのって辛くて 軽蔑されるようなこともやってしまっ  
ていて ごめんねっ  
って  
るんです」

「そうですか でも 最近はお母さんのこと 楽しそうに話してくれますよ」

「そうですか 私 仕事で帰り遅いんですけど、あの子、待っていてくれて、ご飯とかお風呂も一緒なんです でも、北番さんのことも、

すごく慕ってて・・ 今度は、北番さんのご実家に行くの誘われて、すごく行きたいと言ってきたんです だけど、女の子ですし・  
・心配で」

「はい 誘ったんですけど・・サッカークラブに入ればって言ったのも僕なんです。でも、クラブではいきいきと走り回っているんですよ 楽しそうに・・だから、僕の地元の夏祭りなんですけど、僕の父母とか兄夫婦もいますし・・なのちゃんが楽しんでくれればなあって思っています 女の子だから、僕も、そのへんはわかまえていっているつもりですし、どうか、許してもらえないでしょうか へんな意味じゃあなくて 僕はなのちゃんのことを大好きです のびのびと真直ぐに育っているのを見てると嬉しくなります」

「私 北番さんには感謝しているんです 今日 お話できて、安心しました。私 お仕事お休みできなくて、夏休みでも、あの子をどこにも連れて行ってやれなくてー 母親としてはおかしいかもしれないけど あの子、すごく、楽しみにしてるんです ご実家のほうに連れて行ってもらえるのなら、よろしくお願いします」と、お母さんは僕に向かって頭を下げてきた。

その後、なのちゃんを呼んで、一緒に坂道を下りていくのを見ていると、なのちゃんはお母さんに飛びつくように抱きついていて、振り返って僕に手を大きく振っていたのだ。

お盆を過ぎたあたり、僕となののちゃんは木之本駅に降り立っていた。なののちゃんはショートパンツにTシャツにリュックを背負って、お母さんからというお土産袋を提げていた。

暑い日差しの中、歩いて実家に向かって、庭先には母がキュウリと小さなスイカを庭先の水道のところで洗っていた。

「あーあ なののちゃん いらっしやい 暑かったろー」

「こんにちわ おばさん これっ お母さんから、召し上がってもらいなさいって」と、被っていた麦藁帽をとって、ぴよこんと挨拶をして、持ってきた菓子箱を差し出していた。

「まあ まあ そのの気使わなくていいのにー なののちゃん、大きくなったカナ 可愛らしくて・・ 今な なののちゃんに食べてもらおうと、スイカ採ってきた 小さいけど、甘いよ」

父も交えて、冷や麦とスイカでお昼を済ませた後

「秀 どうする？ 今、縁日で露店なんかも出てるよ 一度 なののちゃんが行っといでよ 帰ってきたら、なののちゃん 浴衣用意してあるから、それ着て、花火見に行けばいいやね こっからでも、見えるけど もっと よく見えるところ行けばいいやね」

「そうだなー そうしょっかー」

陽が少し傾いてきたのを見て、僕達は地蔵院の縁日を目指した。おそらく、彼女は初めてなのだろう、こういうのは。眼を輝かせて、いろんな露店に興味を示してはしゃいでいる風だった。まだまだ子供なのだ。院内で願い事を書いて納めるというカエルを買ってあげると、なのちゃんは内緒と言いながら何かを書き込んで納めていた。そして、家に帰ると、かがみさんが出てきて

「まあ なののちゃん どう縁日 楽しかった？」

「ウン 楽しい あのね 草団子食べたんだあー おいしいの」

「そう 良かったネ お義母さん 待ってるわよ お風呂入って、浴衣 用意してるって」

なののちゃんが着替えて現れた時、僕はびっくりした。少し、お化粧もしているのか、眼のあたりも明るくて唇もくっきりしていて紅いような……。そして、帯も後ろの部分が花のようにふわっとしていたのだ。

「どう 秀君 上出来でしょ 私 帯の結び方 練習していたのよ なののちゃんのためにネ」と、かがみさんが自慢げに言ってきた。

「そうか すまんのー ほんと 可愛いよ」

「でしょー 髪の毛もね」

かがみさんに言われて、見てみると三つ編みして途中で大きなコサージュみたいなので髪の毛を留めていたのだ。なのちゃんも両手を伸ばして気に入っている様子だ。それも、僕には可愛く見えていて、その時、なののお母さんには 申し訳ないけど抱きしめた と思ってしまっていた。

そして、僕も浴衣に着替えて、早い目に寿司桶のものをつまんで、時間を見てぶらぶらと、花火がよく見えるほうに歩いて行った。なのちゃんは、やっぱり、僕にぶら下がるように腕を絡めてきていた。僕も、ビールを飲んでいたので、いい気分になって歩いていた。

「シュウ 私 幸せやー こんな風にもらってー みんな優しいし 来れて良かったワァー」

実家から戻って数日後、夜、電話が鳴って、ななのちゃんのお母さんだ。

「もしもし 北番さん？ この前はななのがお世話になりました、ありがとうございますございました」声がななのちゃんにそっくりなのだ。

「あー いえ 僕も楽しかったです」

「ななのはなんかご迷惑なことじゃありませんでした？」

「いいえ みんなから可愛がられてましたよ 父母もウチは男二人だったから、女の子が欲しかったみたいで、楽しんでました。良い子だって、また、連れといでよって言ってました」

「そう！ うれしい いくうー」

「・・・ななの だろう なんかおかしいなって思った からかうなよー」

「えへっ ばれたか お母さんのん借りちゃった あのね お礼にウチでご飯招待したいんだー たいしたもん用意できないけど お母さんも、誘ってみなさいって言うてるしー」

木曜日、お母さんが休みだというし、僕が仕事を終えて向かうと、

途中までなのちゃんが迎えに来てくれていた。

「あのね 私が、シュウのここに行ってるのは内緒ね」

「もちろんだよ 叱られちゃうよ」

「ウン 今ところシュウはポイント高いから」

案内されたのは、3階建ての古いマンションで2階の端っこの部屋だった。

「いらっしやい 狭いところですけど、どうぞ この子ったら、朝から、張り切っていて 北番さんに食べてもらうんだって」

そんなに広くないキッチンに連なっている部屋に座卓が置かれていた。それ以外にもう1部屋あるみたいで2Kのつくりで、確かにそんなには広いと思えなかった。そして、机のうえには、ちらし寿司が・・・一度、なのちゃんが作ってくれたものだ。なのちゃんが冷蔵庫からお刺身の皿を出してきてくれた。

「おビールしかないんですけど」と、お母さんがコップと出してくれて、継いでいる時、なのちゃんが、お母さんにもコップを渡して

「お母さんも飲めばいいじゃない ずっと 飲むのやめていたんでしょ」

「そっ そう じゃあ飲もうかなー お実家のほうから、いっぱい椎茸とかきゅうりをいただいてありがとうございます それに、この子に浴衣までご用意いただいて 帰って来て、とってもうれしそうに話ししてくれました ずーと、しゃべりっぱなしでー 楽しかったみたい おみやげのサラダパンもおいしかったわー 私、迷ったけど、この子連れて行ってくださって、本当にありがとうございます いました ご両親にもお礼を言っておいてくださいね」

「いえ いえ ウチの両親も女の子だからって とても楽しませてもらっているみたいですよ ウチは男兄弟ですから、女の子が欲しかったってね それに、なのちゃんは素直で良い子ですから ご飯の用意なんかも手伝ってました」

「そう のご飯の用意も 家のことも掃除、洗濯 全部やってくれてるの お料理も私なんかより、ずーと上手なんですよ」

その時、なのちゃんがキッチンでなんかやっていたかと思っ  
ら

「これっ 椎茸の肉詰め お肉好きだよね シュウ」と、焼き立てを持ってきた。

「・・・なのの・・・あっ この椎茸 いただいたの 肉厚でおいしいですよ 確か、ちらしにも入っていたみたい」と、お母さんが言っていたけど、なののちゃん ダメだよ シュウってと、僕となののちゃんは顔を見合わせていた。その時、なののちゃんはお母さんにわからないようにちよこっと舌を出していた。可愛いと思っ

て、その肉詰めには喰らいついていた。

「うまい！　なの・ちゃん」僕は、お母さんのほうを思わず見  
ていた。

その後、お腹がいっぱいになって、帰る時、お母さんが

「また　時々来てくださいね　なのも　喜んでいるみたい　これ  
からも　よろしくね　なののこと」と、なんとも意図が不明なこ  
とを言われて、ほろ酔いで帰ってきた。

次の日、僕が帰るとななのちゃんが来ていて、勉強をしていた。実家に行って以来、ななのちゃんは髪の毛を留めたのをまた上に持ち上げるようにしていて、うなじが見えていた。僕は、この子もだんだんと大人に近づいているんだ感じていた。

「昨日はありがとう おいしかったよ」

「うん あのね お母さんから聞かれちゃった まさか、お付き合  
いとかしてるのって 名前呼び捨てで呼んでしまったから」

「ふーん どうした？」

「そんなわけないじゃないって言っておいた ただ 私はあの人の  
ことが好きなんだと思うって言ったけど」

「・・・」

「お母さんはネ まだ、あこがれているだけよ 年も離れているし  
・・・ 確かに、いい人だけど これから、多くの出会いがあって色  
んな人と知り合うわって」

「なの やっぱり こうやって ここに来るのは良くないよ お  
母さんを欺くことになるよ」

「嫌！ 毎日でも、シユウに会いたいモン」

「しかし、なのちゃんも女の子だよ 娘が男のところに、毎日行っているの知ったら反対するに決まっているだろう？」

「・・・だったら、シユウのお休みの水曜と、それに、土・日だけ私、お母さんに打ちあける 勉強教えてもらおうからって言うワねっ？ いいでしょう？」

「わかった なののがそれでいいのなら」

「なのちゃんも学校が始まったのか、しばらく来てなかったが、水曜日、僕が部屋にいると」

「こんにちわー まだ 外は暑いやんかー」と、言いながらベッドのところに行って、スカート脱ぎ出した。そして、スカートをベッドに丁寧に置いたら、ベッドにくしゃくしゃになっているタオルケットを敷き直しながら」

「シュウ くしゃくしゃのまんまやんかー 広げとかんと湿気たまんまになるでー シーツもくしゃくしゃやしー」

「わかったよー 洗濯して、さっき 取り込んだとこなんや」

「そしたら よけいやー 熱いままやったら 又 湿気こもるやんかー 広げて冷まさなー」

「うん そーだな なののは本当に家事のこと万能やのー それより 早く何か穿かないのか？」

「これ オーバーパンツやんかー この下にも穿いてるでー」と、ずり下げて見せようとしてきた。

「わかったよ もう いいよ」

「なんやねん シュウかって 短パンやんか」と、カバンからプリントを取り出していた。

結局、上は学校のブラウスのままで下は紺色のパンツ姿で勉強を始めたのだ。しばらくすると

「これっ 宿題やってん 次は、数学の予習 わからへんかったら、聞いて良い？」と、後ろに馬の尻尾みたいに留めていた髪の毛を上にもちあげるようにして留め直して、おくれ毛を耳のうしろに描き上げるしぐさで僕のほうを見つめてきた。

そのしぐさにドキッしている僕のことを気に留めることも無く、なのちゃんは数学の本を開いていたのだ。だけど、傍で本を読んでいる僕に何かを聞いてくるようなことは無かった。

「よし！ 完了 数学は方程式になるんだあー まあ ちゃんとやってくれば理解できるんだけどネ わかんなくなったら、シュウ お願いな 今日は、もう帰るネ 暗くなる前に」と、スカートを又、穿きだしたけど、めくりあげるようにして

「このスカート 暑いから嫌いやー 長いし うっとおーしい」と ブツブツ言いながら帰って行った。

でも、確か今のは夏物になってるはずなんだけどなあー。ずーと、あの子は短パンのことが多かったからなんだろうな。僕は、そうだ問題集を買っておいてあげようと思っていた。



次の土曜日。グラウンドをななのちゃんが後ろに束ねた髪の毛を振り回すように元気に走っていた。

僕がグラウンドの脇で見ていると、朝宮監督が寄ってきて

「北番君 女子のほうも試合をやってみようと思ってるんだ。とりあえず、隣のチームでねそこは、社会人も入っているんだが・・年齢はウチにあわせてくれらしい 練習だから」

「そーなんですか いや いいんじゃないですか 彼女たちも張り合い出るだろーし」

「うん みんなもやりたいと言っていた。それでな 相談なんだけど ユニフォーム揃えようと思うんだけど・・それぞれの負担じやあ どうだろーうな」

「ああ ななののは 僕はべつに構わないですけど・・ 事情があつて、負担となると重荷になる子もいるかもしれませぬえー」

「だよなー やっぱり 協賛金という形で父兄から集めたほうがいいかあー 送迎のバスは僕の知り合いの自動車屋から借りて、僕が運転するんだがな それは男子の時もなんだ」

「あの一 僕も 偉そうなことは言えませんが、協力させてもら

いますんで 足らなかつたら言ってください 監督もかなり負担して  
るんでしょ」

「まあ それは 僕の楽しみでもあるからな」

結局、目標には届かなくて、僕もボーナスから不足分を協賛していたのだ。併せて、なのちゃんのシューズも新調することにした。

その日、僕が部屋に帰ると、なのちゃんが、駆け寄ってきて

「あかんよー こんなんにお金使わんとって」

僕は、数学と英語の問題集をテーブルの上に置いておいたのだ。

「どうして？ 問題やっていったほうが実力つくよ」

「そーなんやろけどー 私は、予習復習もちゃんとやってるでー  
平気やー」

「それは わかってる けどな・・ こういうのやっていると 授業では触れないこともわかるようになってくるんや 僕は、なの  
が頑張ってるの知ってるからこそ こういうことも必要だと思う  
珠には 言うこと聞け！」

「ううー わかった でも ありがとう シュウ」

「それとな 明日 僕が帰ったら、スポーツ店に一緒に行く 朝宮 監督の紹介 ななののシューズ買いに」

「ええー 要らん 要らん そんなん」

「要らんことないやろー もう、小さいはずだよ この半年で、だ いぶ背が伸びているよ それに、横の方が破れ掛けている 貰った もんだからな」

「シュウ 私・・・ そんなんしてもうて・・・ どうしたら ええ のん？」

「だからー 前に言ったろー ななのは 勉強もサッカーも伸び伸びとやって 明るく真直ぐに成長していってくれれば 僕も楽しい んだよ 今は、余計な事考えるなよー」

「・・・ウン ええのかなー シュウに甘えてて」と、下を向いていたかと思ったら、長いまつ毛を濡らして上目遣いで僕を見てきていた。僕は、動揺していたが

「いいよ 僕は、なのなの笑顔が好きだよ さあー 今日のご飯は？」

「えへっ 私の愛情たっぷりの 豚肉のオムレツあんかけとマカロニサラダ」と、可愛い笑顔を見せてきたのだ。

6-6 ななの初めての練習試合

10月になっての土曜日、ななのちゃん達は試合でバスに乗って出て行った。僕は、仕事があるし、残った男子の連中が年上の子を中心にグラウンドで練習していたから、何かあった時の為に、離れる訳に行かなかったのだ。

お昼前、彼女達は帰って来たのだが、暗い雰囲気だった。予想された結果だったのだけど、それ以上にショックが大きかったみたいだった。声も元氣なく解散していった。

部屋に帰ると、ななのちゃんも氣のせいかな元氣無かった。

「どうした？ まだ初めての試合だろー そんなに甘くないよ」と、言ったけど、彼女は膝をすりむいていたみたいで傷テープが

「怪我したの？」

「大丈夫 ちょっとね パスを受ける時、こかさされた 5対0」

「そうかい しょーがないよな 向こうも遠慮はしないってことだから ちゃんと手当したのか？」

「ウン 試合終わってから 向こうのお姉さんが親切にしてくれて 私 悔しくて泣いていたら あなた達はもっと声を出し合わなければ駄目って キーパーの子が声出してるのに 他の子は知らんぷ

りじゃあないって それは監督も言ってた」

「そうかぁー それは練習中も感じるなぁー 監督がもっと声を出し合ってヤレってんに 声が小さいよ」

「だってさー そんな大きい声 しんどいやん」

「だからよー みんなを励ます意味でも 私はここに居るよって 合図しながら相手に知らせてパスもらうんやー」

「そうかー そんなことも私 わかってへんかってんなー リョウの声 聞き流してたわー」

「まあ いい経験だよ 又 1か月後 試合やろー 皆で、今回のことを考えて練習すれば 強くなっていくよ」

「ウン 頑張る シュウ 今のシューズ すごく 走りやすい ありがとう」

「そうか それは良かった 将来のなでしこジャパン」

「だからー アホかぁー 私はシュウの飯炊き女にしてもらえれば ええねんやー」

11月になって、レディース達はバスに乗って出て行った。あれから、声もかなり掛け合うようになっていたので、僕は今回は成長しているだろうと期待していた。

そして、帰ってきた時、賑やかな雰囲気は無かったが、彼女達は男の子達が練習しているグラウンドの隅で、パス回しをしていた。声を出し合って確認している様子だった。朝宮監督が僕の元に来て

「3対1で負けたけど、なかなか良かったよ チームとしても成長しているよ 彼女達から、もう一度、忘れないうちに確認しておこうよ言い出した 手応えを感じているんだろう 初得点もしたしな」

「そうですか いい雰囲気だ 楽しみですね」

「ああ 3年のアミがリーダーとしてしっかりしてきたけど、もう卒業なんだよなあー」

その日、帰るとテーブルに英語の教科書を広げて

「今 火点けたとこ ロールキャベツ」

「そう いつも 手の込んだもの作ってくれるネ ありがとう」

「ううん そんなに 手かからないよ 今も 勝手に煮込んでくれ

るし」

「なのは料理の天才だよ 今日試合 まずまずだったらしいな」

「うーん リョウが結構 止めてくれたからね だけど 私等 まだまだパスがつかうがなくてゴール前まで遠いんだあー」

「でも 監督は チームとして成長していつて言ってたよ  
これからだよ」

「そうだね シュウもコーチしてくれればいいのにー」

「僕なんて たいしたことないよ まあ 機会あったらネ」

「でもね しばらく 試合もないから 走り込み中心だって 練習  
でもね 走るの嫌いって子 多いんだ 走らないとパス 通らな  
いよネ」

「なのって 何にでも センスあるような気がするよ」

「そんなことないよー 私 必死なんだからー シュウの為に・  
」

12月になって、なのちゃんが

「シュウ 冬休みになったら、又、ウチに来てーなあー 私のお誕生日とクリスマス」

「ええー なの 12月生まれやったんかー」

「ウン 12月23日 13歳」

「そうかー それは お祝いしないとな」

「シュウは いつ 誕生日？」

「ああ 3月7日」

「ふーん じゃあ そんな時 また お祝いだね」

「いいよー これっくらいの歳になると、そんなにめでたくもないから」

そして、クリスマスも過ぎて居たけど、お母さんの休みだという日にななのちゃんの家に行った。僕も、定休以外の日の休みを取っていたので、お昼過ぎに伺っていた。

「なのちゃん これっ 誕生日祝い」と、部屋に入って直ぐに渡したら

「わぁー ありがとう シュウ・さん」と、なのちゃんも慌てていた。

「開けて いい？」

「ウン 何がいいのか 迷ったけど」

僕は、ピンクのキラキラしたラインが入ったスニーカーを選んでいたので。なのちゃんは開けると直ぐに、僕にお礼を言ってお母さんに見せに行って、履いて見せていた。

「大きき どうかなー 合わなかったら、代えてくれるって言うってたけど 少し、大き目にした」

「ウン 大丈夫 中敷で調整する ありがとうネ これ 可愛い」

その日は、僕の為に焼肉を用意してくれていたけど、逆に散財させてしまったと僕は、恐縮しながら食べていた。

「北番さん 遠慮しないで食べて飲んでネ」と、お母さんは僕にビールを継いできてくれていた。

「あのね なの 通信簿 音楽を除いてオール5だったの 1学期もそうだったんだけど、たまたまなんだと思っていたら、今度も

でしょ びっくりしちゃった 北番さんにも教えてもらってるから  
この子 頑張ってるんよネ」

「そーなんですか ななのちゃん すごいネ サッカーも頑張ってるし」

「うふふっ だからー 私 いつも必死なんやって ゆうてるヤン」

そして、帰る時、なのちゃんが表まで見送ってくれて

「なあ お正月 実家 帰るんやろー 私もー」

「ええー お母さんは？」

「うん 仕事やと思う 勉強のご褒美になって ゆうたら 許してくれるとおもうネン」

「まあ ウチは歓迎すると思うけど・・・ お母さんの許しがないとな それにお母さんだって寂しがるだろー いくら 仕事といつてもー」

「ウン 元旦の朝 お祝いしてから、今度は一人で行くよ 木之本まで もう、子供やないねんから・・・それっくらい 平気 たぶん」

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~28178](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~28178)

---

その小さな女の子のことが気になってしまったんだが、どう接し  
ていけばいいんだろう

2023年03月30日 15時59分発行